
淋無喜有 ~ Ben 1 0 side S t o r y ~

台風X号

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

淋無喜有 Ben 10 side Story

【Nコード】

N9606K

【作者名】

台風X号

【あらすじ】

究極コラボ作品の秘密兵器、小説家になろうに投下。ハッピーツリーワールドシリーズ並みの原作の多さに吃驚しないでくれ。この小説は、今までの作品とは違い、混沌さを極めていますのでご注意ください。東方のキャラが出にくいこともお話の中ではよくあります。批評と酷評を中和させた感想をお願いします。Ben 10 絡みな作品です。シーズン1無事終了。シーズン2をお楽しみに！

淋無喜有」始まりの篇 第一話 始まりし幻想（前書き）

究極コラボの誕生。すごい作品です。

淋無喜有」始まりの篇 第一話 始まりし幻想

ある日の闇幻想郷。

フレイキーは、目覚まし時計を止めて、大きなあくびをした。

「今日は、何曜日だったけ？」

フレイキーは、カレンダーを見た。

5月30日火曜日。

フリッピーとカドルスが、フレイキーの家のチャイムを鳴らした。

「フレちゃん、大変なことが起きちゃった早く来て。」

フレイキーは、頭の上に？マークが出ていた。

「大変なことってどういうことなのかな？言ってみますかですう。」

淋無喜有」始まりの篇 第一話 はじまりし幻想

フレイキーは、ドアを開けて、フリッピーとカドルスと一緒に大変なことが起こったところへ行った。

「あれって、十字架の御柱ですか？」

フリッピーが答えた。

「フレちゃん、正解だよ。十字架の御柱は、セルインジー・キリスト様が閻幻想郷の魔界を封印するために作ったんだ。」

カドルスが、続けて言った。

「でも、十字架の御柱が一本でも消えうせると、部分的に魔界に通じる穴ができてしまうんだ。僕は其れをクロスホールって言っているよ。」

フレイキーは、心配そうな顔をしていた。クロスホールは、危険な穴だ。

しかし、十字架の御柱がなぜ折られたかは、分からなかった。

カドルスは、あるものを見つけた。

其れは、傷だらけの丸く水色の生き物だった。

スニフルツズの家に来てきたカドルス達は、スニフルツズに調べてほしい生き物がいるということを話した。

カドルスとフレイキーは、楽しそうにオセロをしていた。

スニフルツズから、意外な言葉が吐かれた。

「この生き物、UMA（未確認生物）だよ。名前は、モコート・デイスティア・ヴァンスー・フライング・フライ。エイリアン説もあるが、かなり不明な生き物だよ。」

フレイキーは、その生き物に名前を付けた。

「モコート・ディセスティア・ヴァンスー・フライング・フライって長い名前ですう。僕は、モコが似合っていますですう。」

フロッグマンが、突然やってきた。

「大変だ。スニフルズ。赤色の球体みたいなのが、上空を回っているんだよ。」

フリッピーは、フロッグマンに言った。

「フロッグマン、もしかしてクロスホールから現れたのか？」

「ああ、そのクロスホールだ。しかも、棒結界みたいなものを弾幕にして襲いかかった。あの野郎ども、今度やったら殺す。ブラックホールで葬ってくれる！」

スニフルズは、できるだけ安全なところにみんなを避難した。

ギグルスとペチュニアは、気にくわない表情をしていた。

モコは、目を覚ました。

ランピーは、モコを見ていた。

「赤色じゃないね、君は。」

モコは言った。

「みんなは、赤色のモコート・ディセスティア・ヴァンスー・フラ

イング・フライのことを知っているようだね。だったら教えてあげるよ。」

モコは、みんなにいろんなことを教えてあげた。

キッズウィンは、空から降ってくる棒結界を見て、みんなに言った。

「みんな、ここも危険だ。早く逃げよう。」

みんなは急いで逃げた。が！モコは動かなかった。

カドルスが慌てた声で言った。

「モコ、早く逃げてー！」

その時、モコは、結界を作り出し始めた。

無数に作った結界は、一部は、棒結界に壊されたが、其れをモコは、天高く舞いあげた。

そして、巨大な爆発音がした。

上から、赤色のモコが、落ちてきた。それも30000体と言ったところか。

赤色のモコ達は、四方八方に去ってしまった。

モコは、カドルス達に言った。

「みんな来てよ。大丈夫、ここら辺のモコ達は、全員死んでいるか

ら。」

ギグルスとフレイキーは、モコに話しかけた。

「貴方は、赤色のモコの行先は、分かりますか？」

モコは、緊急事態のような表情で言った。

「赤色のモコは、リアルワールド（人間界）、幻想郷、
創造郷に行ったら、そこを支配してしまう。」
捻死碎楼、

衝撃の真実を聞かされた。みんなは、慌てていた。

セルインジー・キリストと孕陀がやってきた。

「君達の助けは必要ありとみなされたようだ。」

次回 淋無喜有」始まりの篇 第二話 人間界へ

淋無喜有」始まりの篇

第一話

始まりし幻想（後書き）

次回もお楽しみに

淋無喜有」始まりの篇

第二話

人間界へ（前書き）

とても不可解な出来事。

淋無喜有」始まりの篇 第二話 人間界へ

謎のキャラクターによって、閻幻想郷だけにとどまらず異常事態の異変が発生。謎の鍵を開けるには、モコート・ディセスティア・ヴァンスー・フライング・フライという生命体であった。彼によれば、クロスホールから無数の赤色のモコが現れて棒結界で総攻撃を開始し始めた。だが、水色のモコは、其れを結界で破り、のちには30000体の赤色のモコを倒したのであった。

セルインジー・キリストと牟陀は、モコから不気味な言葉を告げられた。

「十字架の御柱が折られた原因は、たぶん、僕の予想をはるかに上回る者がしたと思うんだ。」

セルインジー・キリストは、悩んでいた。

牟陀は、クロスホールを見ていてまずいことに気付いた。

「もしかしたら、赤色のモコの死体とは別の者達が出ていった可能性があります。」

フレイキーは、牟陀に質問をした。

「それって、まずいことなのですか？」

牟陀は、慌てて言った。

「そういうこと。そもそも、魔界に封じ込めなければならない者達

が、この場所から出たならば、その者達を虐殺するしかない。」

フリッピーは、虚しさそうな表情をしていた。確かに、魔界の者を大量虐殺するという神の声は、正しいがかといって自分には、キツズウィン達のようなDepression Concrete Rivalsのメンバーが使う魔法みたいな能力を持っていない。

淋無喜有」始まりの篇 第二話 人間界へ

カドルス達、ハピツリのメンバーは、一人を除き、能力を持っていないように思えたが。

セルインジー・キリストから衝撃発言を聞かされる。

「カドルス達にも、力がある。心配するな。」

トウーシーは、びっくりしていた。そう自分達にもキツズウィン達のような能力があるなんて信じてはいなかったからだ。

スプレندیドのような、能力かなと期待しているトウーシー。

一方、人間界。

配管工部隊の一人で、浅井山智熱だった。

彼は、ルーゲというエイリアンを探している。

捕獲したら、ナルボイドに入れるつもりである。

「いたいた。よしっ。」

エイリアンチップを叩いて、エイリアンヒーローになった。「ゾーンドリーム」という声で、びっくりしたルーグは、逃げていた。

しかし、意外な展望を迎えた。ルーグの下半身が、残っていた。

「これは、気持ち悪いな。誰の仕業だろう。」

ゾーンドリームは、気になっていた。

ルーグの下半身のあちらこちらに、エイリアンの血が飛び散っていた。よく見ると大腸と思われる部分が残っていた。

闇幻想郷

カドルス達は、人間界に移動し始めた。

セルインジー・キリストと牟陀は、新しい十字架の御柱を立てた。

人間界

カドルス達は、人間界についた。

被害は、まだないようだ。

フレイキーは、モコに言った。

「人間界、まだ襲われてないみたいです。」

モコは、あるものを見ていた。

其れは、鉄の物体に手をかざして、自らの体を鉄にして戦う男の人物がいた。

「一体、誰なんだろう?」

ペチユニアは、赤色のモコが30体、こっちに来るのを見た。

「ねえ、みんな赤色のモコがこっちに来るわ。」

キッズウィンは、右手に雷を起こして放った。「サンタ・サンダー!」

電撃が、赤色のモコ1体に命中した。赤色のモコは、感電死となった。

フロッグマンとシャーベルタイガーは、ブラックホールと鉄の棒を利用して、攻撃をした。

赤色のモコ10体が、フロッグマンとシャーベルタイガーにやられた。

「よっしゃ!」

キモエリザベスは、放射能を吐いた。ある意味、気持ちの悪い奴だ。

赤色のモコは、棒結界で、放射能を消し去った。

キッズウィンは、電撃をためて撃ち込んだ。

「サント・サンダーオメガ！」

大きな稲妻が、赤色のモコ達を全滅させた。

その光が、男にも見えた。

男は、その場所へと歩いて行った。

次回 淋無喜有」始まりの篇 第三話 出会いとともに何かが起こる

淋無喜有」始まりの篇

第二話

人間界へ（後書き）

次回もお楽しみに。

淋無喜有」始まりの篇 第三話 出会いとともに何かが起こる（前書き）

序盤戦が始まる。

淋無喜有」始まりの篇 第三話 出会いとともに何かが起こる

前回のあらすじ

闇幻想郷から、人間界に移動したカドルス達は、赤色のモコと激闘をした後、ある人物と遭遇した。その人物とはいったい誰なのか？そして赤色のモコの被害対策は？

人間界

カドルスは、その男の名を聞いた。

「ケビン・レビンだ。」

淋無喜有」始まりの篇 第三話 出会いとともに何かが起こる

ケビンも、赤色のモコと対決していたようだ。

「こいつら、ピラニアを繰り出してきて、危うく食い殺されるとこるだぜ。」

トゥーシーは、赤色のモコの血液を見ていた。

ランピーは、トゥーシーに言った。

「トゥーシー、子供はそんな残酷なものはないほうがいいよ。」

トゥーシーは、否定するように言った。

「僕達の世界は、昔、これより残酷な出来事が起こってたんじゃないか！」

ランピーは、少し言葉を控えた。

ケ빈は、いいことを思いついた。

「俺の仲間に君達を合わせてやろう。一人は、10種類のエイリアンヒーローになる者ともう一人は、俺の……」

「恋人ですか？」

フレイキーが言った。

「あーそうそう。って違うよ。」

ケ빈は、慌てていた。

「恋人には、まだなっていないんだよ。友達のちょっと上あたりぐらいだ。」

カドルスとギグルスは、ケ빈が、いまだに頬が赤くなっていることをジロジロと見つめていた。

闇幻想郷

セルインジー・キリストが、賢者の部屋で、ある書類を探していた。

「赤色のモコ意外に、魔界の者達が地上にいるということはまずいことですねセルインジー・キリスト。」

卒陀も書類で探していた。

「厄介なことが起こると責任は誰にあると思うんだ？」

セルインジー・キリストは、何かを発見した。

「卒陀！こっちに来てくれ。」

「何か見つかりましたか？セルインジー・キリスト。」

「こいつ、モニターに映っていた。奴と同じだ！名前は、ゲーゼ
ーゼ 種族妖怪 能力一瞬のうちに相手を黙らせる程度の能力 性
別男 危険性 level 3。地上では、level 2までが、退治
してもOKだが程々になっている。こいつは、まずい相手だ。」

セルインジー・キリストは、焦りながら言っていた。

人間界

ベン・テニスンとグウェン・テニスンという二人の少年少女がいた。

ケビンの事情も聞いたことで、カドルス達に話した。

「君達は、どこから来たの？」

キッズウィンが答えた。

「閻幻想郷という場所から来たんだ。」

グウェンは、闇幻想郷と聞いてピンとこなかった。ほかの二人も同じような感じである。

配管工基地で、赤色のモコの情報を探すことにしたベン達は、カドルス達も一緒に日本へ向かった。

日本に存在する配管工部隊は、マックス・テニスの上司がいることで知られている。其れが浅井山智熱である。彼は11歳の時、配管工入りし、14歳から以降、昇進を繰り返して、マックス・テニスの上司にもなった。彼は、太陽系第三惑星保護部の監察官の証もある。

日本に着いたベン達は、日本の配管工部隊がいる場所に移動した。

「ここが、日本の配管工部隊。」

そして、リーダーのいる部屋にやってきた。

ケ빈は、すごい場所だと目を輝かせていた。

「ベン・テニス、昇格が待ち遠しいのは分かるがここまで来るのには、理由があるな。言ってみてくれ。力になる。」

「赤色のモコについて、教えてほしいんだ。」

浅井山は、情報が来ていないエイリアンなのかわからない生命体のことは、知る由もない。

「赤色のモコは、そこにいる水色の球体のと同じか？」

「同サイズだよ。」

「すまない、配管工のデータベースには、載っていないんだ。」

カドルスに、セルインジー・キリストから連絡が入った。

「ちょっと外に出るけどいい？」

フリッピーは「別にいいけど。」

カドルスは、携帯電話でセルインジー・キリストと話した。

「何か見つかりました。セルインジー・キリスト様？」

「其れが、ヤバいことになった。」

「どうしたんですか？赤色のモコの情報ですか？」

「赤色のモコじゃない奴が地上に来ている。名前は、ゲーゼターゼという奴だ。危険性はlevel3だ。カドルス達は、気をつけて行動してくれ。」

「分かりました。」

赤色のモコ、3体がカドルスを狙っている。

赤色のモコは、カドルスに襲いかかった。

カドルスは、避けて避けて避けまくった。

「この野郎、僕の怒りを食らえー！」

カドルスの右腕と左腕から剣みたいなものが出てきた。

「これならいけそうだ。」

カドルスは、赤色のモコ1体を剣で引き裂いた。

赤色のモコの血液が飛び散った。

カドルスの能力は、すごく強い能力だった。

赤色のモコ2体は、怖気ついて逃げて行った。

カドルスは、能力を締めてみんなのところへ行った。

次回 淋無喜有」始まりの篇 第四話 赤色のモコ出没警報パ
ート1

淋無喜有」始まりの篇 第三話 出会いとともに何かが起こる（後書き）

三本立てなのでゆっくり楽しんでください。

淋無喜有」始まりの篇 第四話 赤色のモコ出沒警報パート1（前書き）

赤色のモコの総攻撃は、宣戦布告の様なもの。

前回のあらすじ

カドルス達は、配管工部隊と出会い、日本へ急行。そして赤色のモコの謎はやはり謎のままだった。そんな中、ゲーゼターゼという邪悪な存在が発見された。カドルスの能力が登場し、展望が変わった。赤色のモコと水色のモコの関係は一体？

人間界

ケ빈は、不機嫌そうだった。

「エイリアンだと思うが、どうなんだろうベン？」

ベンは、別の解答を出した。

「僕の場合、妖怪じゃないかなと思うんだ。」

グウエンは、一つだけ気にしていた。

「カドルス達と別行動になったけど大丈夫かしら？」

「心配するな、キッズウイン達もいる。其れにカドルスもだ。能力を使えるのは、凄いことだぜ。」

「まあ確かに。」

カドルス達は、赤色のモコの血液を浅井山に渡して、検索した。

「この血液に関するエイリアンは、存在しません。」

コンピューター音声がそう言った。

淋無喜有」始まりの篇 第四話 赤色のモコ出没警報パート1

浅井山は、妖怪に関する情報も検索したが、何もなかった。

ギグルスとペチュニアは、水色のモコと楽しく会話していた。

闇幻想郷

セルインジー・キリストは、赤色のモコを目撃した。

牟陀は、あるものを見ていた。

人間界

トウーシーは、赤色のモコが3000体来るのを見た。

「みんな、赤色のモコが来たよ。しかもかなりの数だー！」

フレイキーは、水色のモコに言った。

「すごい数ですう。」

モコは「余裕です。僕に任せてください。」

水色のモコの力は、かなりあった。

モコは、多重結界を張り、シールドの役割になった。

赤色のモコは、棒結界で、多重結界を破ろうとしていた。

水色のモコは、立方体の爆弾を繰り出して赤色のモコ3体に投げつけた。

爆発は、激しい。結界も限界に来ていた。

キッズウィンとフロッグマンとニョロトリオとキモエリザベスとシヤールタイガーとレインボーニョロモは、戦闘態勢に入っていた。

とうとう、結界までも崩壊した。

「サンタ・サンダーα!」

「ブラックホールキャノン!」

「ウォーターレーザー!」

「チエルノブイリバースト!」

「ベリリウムキャノン!」

「レインボーデリート!」

赤色のモコは、次々と倒した。

ベン達は、あるものを見た。ゲージテージェっばい生命体があったが、

勘違いだった。

ここにも赤色のモコが200体ほどやってきた。

その時、200体が全員悶絶した。

竹刀を振った後だった。

闇幻想郷

牟陀は、ある事に気付いた。

ゲーゼターゼだけでなく、もう一人の人物がいた。

其れは、両腕にカノン砲を持つ人物だった。

「こいつは、一体誰なんだ？」

人間界

一方、ある場所に両腕にカノン砲を持つ人物があらわれた。

彼は、春日部にいた。

カドルス達は、ばてていた。

ベン達に戻ってきた。

「みんなどうしちゃったの？」

トウーシーは、疲れきった顔で話した。

「赤色のモコが、3000体ぐらい襲って来たんだよ。」

「おいおい、最悪だな。」

フリッピーが言った。

「最悪どころじゃないよ。10体逃げちゃったんだよ。もしここが
ばれたら、最悪だろう。それぐらい、ケビンだって知っているはず
だよ。」

「俺は、まだ配管工に入ってまだ新人でね。へへへ」

笑いながらそそくさと車に乗り込むケビン。

ケビンの首にナイフが近づいた。

「おまえ、誰だ？」

「ラッコの001番だ。ケビン奴等の居場所を教えろ。」

「ああー教えてやる。お前を殺してな！」

車から追い出したケビンは、車の金属部分に触れて自らも鋼鉄の戦士になった。

ラッコ001番は、銃でケビンを撃ったが効かなかった。

ケビンは、ラッコ001番の顔面や頭を殴った。

ラッコ001番は、頭から血を流しながら逃げて行った。

しかし、これは序章に過ぎなかった。

次回 淋無喜有」始まりの篇 第五話 赤色のモノコ出没警報パート2

淋無喜有」始まりの篇

第四話

赤色のモロ出沒警報パート1（後書き）

展開が激しいです。

淋無喜有」始まりの篇

第五話 赤色のモコ出没警報パート2（前書き）

展開が激しさを増しながら、重大なヒントが現れ始めた。

淋無喜有」始まりの篇 第五話 赤色のモコ出没警報パート2

前回のあらすじ

二手に分かれたカドルス達とベン達は、赤色のモコの真相を探すべく、調査をしに行った。しかし、ベン達は、真相をつかめない。カドルス達は、3000体の赤色のモコと激闘を重ねた。そんな中、新たな敵の存在が続々と現れた。はたしてこの進展の行方は？

淋無喜有」始まりの篇 第五話 赤色のモコ出没警報パート2

ラッコ001番は、ある物を見てしまった。

「このヴェリ・ラックス様に貴様の命令を聞くことはない！」

「ゲーゼテーゼ、落ちつけよ。今回の作戦は、地球も固まるひんやりとな。」

ラッコ001番は、ゾクツとした感覚を与えられてしまった。

ベン達は、カドルス達と行動を一緒にした。

ランピーは、おんぼろバスを手に入れて、フリッピーが運転をした。

「よかったよ。フリッピーも運転免許を持っていた。」

フリッピーは、ランピーにツツコムように言った。

「当たり前じゃないですか、僕だって大型自動車の免許ぐらい持って

いますよ。」

ペチュニアは、呆れた表情を見せていた。

オンボロバスと言っても、配管工技術とスニフルズが改良したため、すごいパワーを持っている。

とある場所では、トウダイグサ・スカーレット大佐とタママ二等兵が喧嘩をしている。

「禁忌 平和玉！」

「嫉妬玉ああああ！」

二つのドラゴンボールのパロディによる必殺技がぶつかり合った。

下手にぶつけると町の一個が消えてなくなるといわれており、かなり危険である。

コニシキソウ三等兵は、自分の上司を見て期待感あふれる表情で見ていた。

テリハニシキソウ一匹狼兵は、付き合いきれんといいいその場を去った。

一方、ベン達は、ある場所に来ていた。

とてもすごい山奥。

此処に、使われてはいない配管工基地がある。

この場所を拠点基地にすることにした。東京の山奥だ。

ペチユニアは、袋を持とうかとした。

「この基地、ずいぶん使われていなかったみたい。埃だらけだ。」

ベンが、困った顔をして言った。

配管工ではない、一人の人物がいた。

「君達は、ここを去れ！」

ラッコ002番の右手にナイフがある。

トウーシーは、力を解き放った。

トウーシーの場合、光を拡散させて、其れをビームのように相手を当てる。うまく当たれば、死なすこともできて致命傷を負わすことができる。

「これが僕 능력。」

ラッコ002番は、避けていたが、右胸を撃たれた。

「クソ、ラッコ001番に言いつけてやる……」

ラッコ002番の遺体は、ケビンが何処かへと捨てた。

カドルスとトウーシーの能力が明らかになった。

フレイキーは、あるものを見つけた。

「これって配管工バッチじゃないですか？」

ベンが見た。

「確かに、配管工バッチだ。ということは使われていた形跡があるのか。」

フリッピーとポップは、コンピューターの電源を入れた。

闇幻想郷だけでなく、ありとあらゆる幻想郷も見れるようにシステムを書き換えていくスニフルズ。ラッセルも手伝っている。

ナツティーとカドルスは、このあたりの観察。

突然、闇幻想郷から通信があった。

「セルインジー・キリスト様！」

「君達に非常事態を言う。ヴェリ・ラックスという宇宙人エイリアンとゲーゼあやしという妖が、地球を冷やそうという企んでいるらしい。赤色のモコが、春日部や吉祥寺を狙っている可能性がある。そこから何らかの技術を盗み奴らに渡す前に赤色のモコを全員殺してほしい。健闘を祈るぞ！」

セルインジー・キリストは、左手の親指を出した。

ケビンが質問をした。

「セルインジー・キリスト様に一つ聞きたい。その情報どうやって手に入れた？」

セルインジー・キリストは、意外な答えを出した。

「ケロン星の者からの情報を盗聴したのさ。」

神様が盗聴と言つとなんだか嫌な感じがするが、セルインジー・キリストは最近のテクノロジーにはもの凄い評価を与えている。

「何かと役に立つのだ。とにかく健闘を祈る！」

通信が切れた。

リフティとシフティは、ランピーに何かを話していた。

「何らかの技術を盗むと言つてたな。」

「その技術って何だろう。」

「僕が思うのは、配管工以外の技術だと思うよ。それもエイリアンが使う奴。」

「俺は、ランピーの言っていることが筋が通っているな！」

「俺もだ。」

新入りのラミーが、三人の後ろで言った。

「三人で、何こそこそとしゃべっているんですか？」

ランピーは、慌てて。

「ちょっと作戦会議の練習だよ。」

リフティとシフティもそういう風に言った。

赤色のモコ達は、熊谷に移動していた。どうやら配管工の車が移動しているため、そこを襲撃しようと企んでいるらしい。水色のモコは、醜い欲は嫌いで美しい欲を好む。赤色のモコは、醜い欲が大好きである。

赤色のモコは、配管工の武器は、あまりくらわない。特殊な攻撃を受けて死ぬ為、カドルス達の出番になる。

フリッピーは、バスの運転席に乗り、キッズウィンとフログマンとカドルスとトゥーシーとケビンとグウェンとベンが乗り込んだ。

急いでバスを熊谷まで飛ばした。

配管工の一人、早澤は、配管工技術の銃で威嚇射撃をした。

「この野郎、こんな昼間に襲ってくるとは。」

一匹の赤色のモコが、早澤を襲おうとした時、水色のモコが黒いピラニアで撃退した。

「大丈夫ですか？」

「ああ、おかげさまで。」

ベン達を乗せたバスもやってきた。

ベンは、オムニトリックスからスワンプファイアーの映像出して、其れに変身した。

ケ빈は、道路の成分と一体化した。

フリッピーは、バスに搭載されているビーム銃をターゲットに向けた。

「カドルス達も早く下りて。」

キッズウィンが言った。

「ブラックホールキャノン！」

フロッグマンの強力な攻撃が、赤色のモコに命中した。

カドルスとトウーシーも応戦し始めた。

「僕達的能力で、倒す。」

赤色のモコは、数を減らしていった。

水色のモコは、結界を投げて赤色のモコをその中に閉じ込めて爆破した。

キッズウィンは、電撃で、赤色のモコを真っ黒黒助にした。

闘いは、終わった。

しかし、ラッコ001番が、熊谷に来ていた。

次回 淋無喜有」始まりの篇 第六話 ゲーゼテーゼの不吉な作戦

淋無喜有」始まりの篇

第五話

赤色のモコ出没警報パート2（後書き）

次回も三本立てで行きます。

淋無喜有」始まりの篇 第六話 ゲーゼデーゼの不吉な作戦（前書き）

敵の作戦は、2つの地域を狙うことだった。

淋無喜有」始まりの篇 第六話 ゲーゼテーゼの不吉な作戦

前回のあらすじ

ヴェリ・ラックスとゲーゼテーゼは、コンビであったことが判明。カドルス達は、配管工基地を発見して自らの基地にした。しかし赤色のモコの総攻撃は、熊谷方面に移動した。カドルス達の闘いによって、赤色のモコは、全滅した。しかしゲーゼテーゼとヴェリ・ラックスの企んでいることとは、一体何なのか？そして更にグルはいるのか？謎は、深まるばかりである。

淋無喜有」始まりの篇 第六話 ゲーゼテーゼの不吉な作戦

熊谷にやってきたラッコ001番は、争いの跡がある場所を見つけたが、誰もいなかった。

「くそつ、逃げられたか。封のあいつに報告しなければ。」

封のあいつとは、一体誰なんだろうか？

一方、配管工基地では、リフティが、すごいシステムを取り入れたおかげでどこに赤色のモコが潜んでいるのかが分かるという。

「神出鬼没の赤色のモコを目撃するのは、このダークファンタジーにある技術で作り上げた機械、モコートション・エピローターだ。GPSを利用しているから、分かりやすいぜ。作るのに時間がちよつとかかったがな。」

フレイキーは、緑色の点が密集している場所を見つけた。

「あの場所に、赤色のモコの巣があるみたいですよ。」

カドルスは、ベンに言った。

「その場所どんな場所かわかる？」

「待つてて、調べてみる。」

調べた途端、びっくりしていた。

「なんで、赤色のモコの巣が、太平洋にあるんだよ。」

「もしかしたら、そこにゲーゼーゼとヴェリ・ラックスがいるんじゃないのか？」

ケ빈は、答えに近い言葉を吐いた。

水色のモコは、もうひとつ不可解なところにも緑色の密集地帯があることを見つけた。

その場所は、富士山山頂である。

どうやらモニター映像があるらしい。

グウエンは、そのモニター映像を見て驚いていた。

「DNAリアンがいるわ。というより赤色のモコも手伝いをしてい
るみたい。」

「まさか、ハイブリードもいるということ？」

「ハイブリードか、久々に強敵をぶちのめせるぜ！」

「其れは、待ったという相談だな。ケビン・レビン。」

浅井山と4人の人物が来た。

「浅井山殿か、どうして待ったというんだ？」

「ハイブリードは、我々も戦ったがまるで歯が立たない。ハイブリードを殺す方法がなかなか見つからないんだ。」

「自然の赤の真実、ゲーゼターゼとヴェリ・ラックスは、ハイブリードの手下で、そのハイブリードは3体もいる。」

台風の狂気が姿を現した。

憎悪の力が強い為か、フレイキーはなかなか近寄れなかった。

もう一人は、うちはドルレインだった。時空の操る力は、桁を外す。更に呪印を自らの力でコントロールしている。

更にもう一人いた。名前は、テリハニシキソウ一匹狼兵である。透明になることで注意を散乱させれる。

最期は、台風の狂気の最もわかりあえる人物、寒冷低気圧だ。彼は、冷たすぎる空気で人々を凍死させる自然の殺人鬼だ。

DNAリアンは冷たい場所を好むが、それよりも冷たい場所を嫌う

ことを明らかにしたのは寒冷低気圧である。

台風の狂気もハイブリードに攻撃を仕掛けたが、全く効き目がなかった。

「吾の左肩は、治ったが吾の怒りはおさまらない。なぜならあんなハイブリードと言う下等生物に、貴様も下等生物の仲間かと言われる。殺したくなったぞハイブリードとやらを自然界の七大魔王で殺してくれる。」

ランピーは、緊急警報を見た。

「まずいよみんな、ゲーゼターゼとヴェリ・ラックスが、春日部と吉祥寺に向かい始めたよ。」

ベンは、ヒューモンガゾーに変身した。

水色のモコは、チーム別にした。

ベンと一緒に行くのは、グウェンとハピツリメンバーとうちはドルレインと寒冷低気圧。

ケビンと一緒に行くのは、デプコンメンバーと台風の狂気とテリハニシキソウ一匹狼兵。

ベンは、吉祥寺。ケビンは、春日部に移動を開始した。

水色のモコとフレイキーとラミーは、配管工基地で待つことを決めた。

吉祥寺に到着したベン達は、ゲーズテーゼを目撃した。

「いたぞ。」

「寒冷低気圧の力、見せてやろう。」

生物の温度を絶対零度にする恐ろしい殺戮攻撃が発動した。

DNAリアンと赤色のモコは、全員凍死した。

ゲーズテーゼとヒューモンガゾーとの戦いが始まった。

其れを見ていた、一人の銀髪の少年。

春日部には、一步も通さないようにしたケビン達。

台風の狂気は、自然界から魔物を召喚させた。

赤色のモコは、棒結界で魔物をぶち破った。

台風の狂気は、両手に三角形の青と赤の剣を出した。

「所詮、吾の力に逆らうなんて甘い奴ぞ。」

赤色のモコ40体は、血液が飛び散るほど切られた。

ケビンは、DNAリアンの首を絞めた後、金属の成分で、他のDNAリアンを殴殺していった。

「DNAリアンなんて、弱いぜ全く。オラァー！」

キッズウインは、雷でDNAリアンと赤色のモコを電気ショックで死なせていた。

「僕の攻撃は、これだけじゃないんだ。サンタ・サンダーブレード！」

雷が剣に変わった。

赤色のモコを一刀両断にしていくキッズウインは、軽やかな動きだった。

テリハニシキソウ一匹狼兵は、ヴェリ・ラックスと激闘を繰り広げた。

しかし、忍者の格好した者が見ていた。

「ベコポンにも、こんな者達がいたなんて。」

水色のモコは、外に出ていた。

ハイブリードを見つけた。

「おまえは、この星にいてはいけない存在。今すぐ出ていけ。」

「こんな小さい下等生物が、俺を止められるのでも、馬鹿な奴め、死ねー！」

モコは、ハイブリードの拳をひよいと避けた。

「俺が、このベコポンをどう使うかは、貴様に関係ない。小さい下等生物が！」

モコは、黒いピラニアを繰り出して、ハイブリードを困らせようとした。

「ピラニアなんて、怖くはない。」

ハイブリードは、空を見上げた。

モコが雲を作りそこから槍の雨を降らした。

「こいつ、強すぎる。」

ハイブリードは、ボロボロな体になってしまった。

水色のモコは、ハイブリードを結界の中に閉じ込めた。

「君は、僕を下等生物と言ったが、地球上で一番下等生物は、ハイブリードのことだよ。君は、僕を小さくてザコな奴と思っていても僕には、君を簡単に殺すことができる力が、いくつもあるんだよ。ハイブリードもこの星を侵略しないって宣言したら結界から出してあげる。もし断れば殺す。」

「断る！下等生物の命令は、聞かない。」

モコは、いらつとしていた。

「僕を怒らせたみたいだねハイブリード。君はここで死ぬんだよ！」

モコは、紐を合図にして、結界をバーストさせた。

ハイブリードの肉片や血が飛び散った。

モコは、返り血を浴びないようにシールドを張っていた。

「僕を激怒させるからだよ。」

ゲーゼテエは、ヒューモンガゾーを困らせていた。

次回 淋無喜有」始まりの篇 第七話 ランピーの力

淋無喜有」始まりの篇 第六話 ゲーゼテーゼの不吉な作戦（後書き）

まだまだ行きます。

淋無喜有」始まりの篇 第七話 ランビーの力（前書き）

若干、短めになっています。

淋無喜有」始まりの篇 第七話 ランピーの力

前回のあらすじ

新たな仲間も加わり、ハイブリードがつるんでいることも発覚した。カドルス達は、春日部と吉祥寺をそれぞれ守るような体制になった。水色のモコは、ハイブリードとの対決になった。水色のモコは、謎の無限の力が現れ始めた。ハイブリードは、敗れ去った。

淋無喜有」始まりの篇 第七話 ランピーの力

水色のモコは、魔界から優秀なモコの部下を呼び出した。

「いでよ、マスター・ヴォルとタチイヌイヌノフグリ。」

二人の人物があらわれた。

「これはこれは、モコート・ディセスティア・ヴァンスー・フライング・フライ様、我々を呼び出すとは何事ですか？」

「君達に、行ってほしい場所がある。永遠の騎士団がいる場所に行つてくれ。」

「承知しました。」

吉祥寺では、カドルスとトゥーシーの能力も凄いエネルギーに感じられる。

ヒューモンガゾーは、ベンに変わっていた。

「今の闘いで、しばらくオムニトリックスが使えない。」

ゲーゼターゼは、グウェンに襲いかかろうとした瞬間、異変が起った。

うちはドルレインが時空でゲーゼターゼを押さえていた。

その間に、ランピーは、何かを考えていた。

闇幻想郷

セルインジー・キリストのところに八坂神奈子と諏訪子と早苗がやってきた。

幻想郷には、まだ襲来していないようだ。

神奈子は、永遠の騎士団のうち一人は、危険人物だということを明かした。

名前は、殺沢仁柢體と御刃彦之尊である。この二人の能力は、桁はずれで神の力を超えている。

人間界

グウェンの攻撃を受けたゲーゼターゼは、弱ってきた。

ゲーゼターゼを援護するかのようにな赤色のモコが、グウェンに襲いかかった。

ゲーゼテーゼは、その間に槍を手にしていた。

カドルスの能力と勝負になった。

「君も、すごい能力の持ち主だね。でも、僕に攻撃を仕掛けすぎると死ぬよ。」

「ゲーゼテーゼ、貴様の思うような感覚は、味わえられないよ。僕の力でねじ伏せる！」

赤色のモコは、うちはドルレーンが、全滅させた。

寒冷低気圧は、DNAリアンがまた襲来してきたので、絶対零度の空気で、凍えさせてから、右手に赤紫の剣を出して切り裂いていく寒冷低気圧。

一方、ケビン達は、ヴェリ・ラックスが退散したおかげで、配管工基地に戻ることを決めた。

レインボーニヨロモは、妙な殺気を感じていた。

カドルス達は、いまだに苦戦を強いられていた。

ベンの持っているオムニトリックスは、一日経てば治るエラーを起こしていた。

ランピーは、バスに乗り込んでビーム砲を放った。

赤色のモコ3体に命中した。

「よっしゃー！」

水色のモコは、ラミーに言った。

「ラミー、貴方の行動は、誰かを呼んでいるようだよ。」

「そんなわけないわ。」

ランピーは、力を解き放つ時が来た。

ランピーの能力は、仏教魔法の経典の一つ、考えているものをこの場所に置く魔法。其れがしめ縄であれ、御柱であれ、強力な力を持つ。卒陀も使うことができる。

ランピーは、魔方陣を時空に召喚して、何かを考えた。

「さあ、ゲーゼターゼを殺すためのナイフよ。現れたまえ！」

ランピーの半径、30センチ以内にナイフが一本だけ出てきた。

「よしっ、これを使えば。」

ゲーゼターゼは、カドルスを苦戦させていた。

「苦しいか。」

「殺せる力がなくなり始めているくせに。」

カドルスが読むた瞬間、ゲーゼターゼの胸部にナイフが刺さった。

ゲーゼテーゼは死に至った。

そして、ナイフは、卍に変わり卍は蝶に変わって飛び去った。

ランピーは、能力の消耗に慣れてなく疲れていた。

「ランピー、卍の魔法の一部を能力として持っていたなんてすごいよ！」

「強い、ゲーゼテーゼを殺すぐらいの勢いなんだから凄い！」

ランピーは照れていた。

配管工基地に戻ったみんなは、水色のモコの力も知った。

「ハイブリードを一人で片づけるなんて！」

水色のモコは、部下達を呼び戻した。

「これが僕の家具達です。タチイヌイヌノフグリとマスター・ヴォルだよ。魔界から呼び出したけど此の方達は味方だから安心して。」

「我々は、モコート・ディセスティア・ヴァンスー・フライング・フライ様の忠実なる家具であります。我々が協力できることなら何でもします。」

次回 淋無喜有」始まりの篇 第八話 密室の中に閉じ込められた！

淋無喜有」始まりの篇 第七話 ランピーの力（後書き）

まだまだ続くよ。

淋無喜有」始まりの篇 第八話

密室の中に閉じ込められた！（前書き）

東方元素殿に登場させるキャラクターを先取りしました。誰だかわかるかな？

淋無喜有」始まりの篇 第八話 密室の中に閉じ込められた！

前回のあらすじ

ランピーの能力は、素晴らしく強いものだ。水色のモコの能力はいまだ謎に満ちている。モコの家具も仲間に入って、更に熱湯がわくような展開が続く。ゲーゼテーゼを失ったヴェリ・ラックスに手立てあるのだろうか？

ハイブリードも2体しかない。ヴェリ・ラックスは、何か良い作戦を思いついた。

「ニューヨークを破壊し損ねているから、東京を破壊しよう。それ以前にカドルスとギグルスとランピーとトゥーシーとフリッピーとフレイキーとキッズウィンを閉じ込めよう。俺の作戦が当たれば、密室にして、彼らを出られなくする作戦でほかの者達を困惑させれば、作戦成功だ。」

淋無喜有」始まりの篇 第八話 密室の中に閉じ込められた！

作戦に引っかったカドルス達は、暗い暗い密室にいた。

水色のモコは、あることを思いついた。

「台風の狂気は、自然の真実でも言えるよね。」

「あれのことか。自然の真実元素には、300番目の奴がある。」

「300番目の奴とか、失礼なことは言わないでほしいわね。」

エレメントXとラドン・スカーレットとアンゴルⅡ水素が現れた。

二人の少年と一人の少女である。

「拙者、アンゴルⅡ水素と言います。」

「俺は、ラドン・スカーレットだ。よろしく！」

モコは、エレメントXのことを和尚様と呼んでいる。

無限の能力を持つエレメントX。強さは、桁はずれだという。

カドルス達は、必死になってドアを開けようとしていた。しかしどんなことしても開く気配がない。

エレメントXは、無限の力を持っているのは300番目の元素であることである。相当なパワーを持ち、時間や時空や武器を簡単に作ったり変えたりする。

「カドルス達は、閉じ込められています。よかったら私が行きますよ。」

ベンは、驚きながらある事を言った。

「テレポートができるの？」

「ええ、できます。」

エレメントXは、そう言ってテレポートをした。

カドルス達の前に、エレメントXがあらわれた。

「貴方達、この密室を開けてほしいんですね。まかして下さい。」

結界でドアを破壊した。

カドルス達は、驚いていた。モコと似ている技を持っているなんてヴェリ・ラックスの企みは、赤色のモコとDNAリアンを引き連れて、一斉に東京を襲うという仕組みだが、すぐに配管工が来た。

「いつまでも、同じ相手じゃー困るんだよ。」

ケ빈は、東京タワーの成分と同一化した。

ベンは、オムニトリックスからエコーエコーの映像出して、変身した。

キッズウィンは、電撃を思いっきりため込んだ。

「サンタ・サンダーオメガ！」

DNAリアンが、感電して死亡していった。

寒冷低気圧は、絶対零度で赤色のモコを凍死させていた。

台風の狂気とうちはドルレインは、DNAリアンと戦っていた。

「まさか、こんな雑魚な奴らに、疲れを見せようとするとはな。」

「時空滝門燈！」

時空が、滝のようなギロチンに変わってDNAリアンを真っ二つしていった。

「吾よりも、調子に乗るとは。」

水色のモコは、ある物呼び出した。

「煉獄の周期表降臨！」

巨大な拡張周期表が姿を現した。

「さあ、ターゲット目標補足は完了している。撃てー！」

水色のモコは、拡張周期表に命令をした。

周期表から、ナイフみたいなものが出てきた。

其れが、赤色のモコとDNAリアンに当たって行く。

周りには、血液とナイフが刺さった後になっていた。

浅井山は、エイリアンチップを叩いて、ゾンドリームに変身した。

更に、フォースモードに進化した後、ヴェリ・ラックスの船を襲撃した。

ゾンドリームは、ヴェリ・ラックスと激闘となった。

ゾンドリームが危うく、船に落ちかけたが、ゾンドリームの攻撃で、ヴェリ・ラックスが落下した。この高さは、人間はおろかエイリアンも即死することがある。

ヴェリ・ラックスは、非常口の階段に落下して、赤黒いものを流しながら転がり落ちた。そしてフェンスにぶつかり、ヴェリ・ラックスは死んだ。

カドルス達は、赤色のモコとDNAリアンが退散していくの見て、一安心していた。

ゾンドリームは、船を操縦不能にした後、近くのビルに飛び乗った。

ゾンドリームは、浅井山に変わった。

船は、爆発して消えてなくなった。

カドルス達は、配管工基地に戻って、今回の闘いに何か進展らしきものがあると分かった。

「僕、一つだけ変だと思いました。赤色のモコの動きがハイブリッドに逆らい始めたの思っのですう。」

フレイキーの洞察力は、優れている。

ベンは、浅井山がなぜここにいるのかわからなかった。

「ねえ、浅井山殿。」

「なんで俺がここにいるかって、ベン、君は昇格が決定したんだよ。」

「昇格決定ですか？」

「そうだよ。小中規模的部隊のリーダーを務めたり、超小規模任務を命令したりすることができる。ただし、ふざけないようにな。」

ベンは、嬉しそうだった。

昇格をして、浮かれていた。

永遠の騎士団は、モコの姿をしたアンドロイドを多数作っていた。

ベン・テニスンを殺害しようとしたくらんでいたのである。

次回 淋無喜有」始まりの篇 第九話 ベン・テニスン殺害計画
パート1

淋無喜有」始まりの篇 第八話

密室の中に閉じ込められた！（後書き）

次回も、三本立てで行きます。というより、エレメントXは、東方元素殿のextraextraステージのボスです。

淋無喜有」始まりの篇 第九話 ベン・テニスン殺害計画パート1（前書き）

三本立て行きまーす

淋無喜有」始まりの篇 第九話 ベン・テニスン殺害計画パート1

前回のあらすじ

ヴェリ・ラックスの襲撃が始まった。カドルス達は、暗い密室の中に閉じ込められるも、エレメントXによって助けられた。ゾーンドリームによってヴェリ・ラックスの野望を永遠に消えた。ベン・テニスンは、昇格を果たすも永遠の騎士団が、ベンの殺害を企んでいた。

淋無喜有」始まりの篇 第九話 ベン・テニスン殺害計画パート1

永遠の騎士団の一人が立てたこの計画は、恐ろしいものであった。

しかし、いくつか計画にエラーが生じることも知らずに。

永遠の騎士団の一人はベンの行動を観察していた。

「ベンは、こちらに気付いていない。」

「殺るなら今だ。」

赤色のモコが、永遠の騎士団の一人に棒結界で攻撃しようとしていた。

「貴様、目的はなんだ？」

「ハイブリード様の為に、ベンを連れていく。」

永遠の騎士団の3人は、赤色のモコにエイリアンテクノロジーの武器で攻撃したが、赤色のモコは、よっぽど特殊な武器がないと倒せない。

永遠の騎士団3人は、胸を棒結界で挟まれて死んでいた。

ケビンとカドルスは、暇そうにポーカーをしていた。

「フルハウスだよ。」

「またワンペアもかすっていないよー。」

カドルスはちよつと騒いでいた。

グウエンは、ある物を見つけた。

「これは、何かしら？」

「其れは、拙者の刀だ。」

アングル「水素は、グウエンに言った。

「この刀は、ルシファーセイバーと呼ばれて、惑星を真っ二つにしてみようんだ。扱えるのは、拙者だけである。」

ベンは、配管工基地に戻る途中、何者かにスタンガンを首元にやられて気絶してしまった。

永遠の騎士団は、ベンを捕まえたことに喜んでいた。

しかし、水色のモコが其れを見ていたためばれていたのだ。

「みんな、緊急事態だよ。ベンが永遠の騎士団に誘拐されたよ！僕の家具から聞いたんだけど、ベンをいずれ殺すと永遠の騎士団は言っていたみたいなんだ！」

ケビンとカドルスは、急いで準備をした。

フリッピーは、おんぼろバスにハピツリとデブコンを全員乗せていった。

ケビンは、グウェンと水色のモコと台風の狂気に乗せていった。

アングル「水素とうちはドルレインは、配管工基地にバイクが偶然にも置いてあったため、其れに乗った。

寒冷低気圧はとエレメントXは、上空を飛んで急いでいた。

赤色のモコが途中邪魔をしてきたが、ケビンの車が赤色のモコを轢殺してくれたおかげで道が通れやすくなった。

「帰ったら、たつぷりと洗車だぜ！」

フリッピーは、不安がありながらもオンボロバスを走らせた。

ベンは、囚われの身になっていた。

永遠の騎士団の一人が、ベンに近づこうとしていた。

レインボーニョロモは、海を見ていた。よく見るとハイブリッドの

基地があることに気付く。

「あんなところにあつたのか。」

寒冷低気圧は、エレメントXと共に、永遠の騎士団が存在する場所を見つけて、ほかのみんなに報告した。

「永遠の騎士団の居場所を発見した。みんなスピード違反するぐらいのスピードで来てくれ。」

台風の狂気は、変な風に思った。

「自然が責任を持つといっても人間だぞ。相手は。」

しかし、モコのアンドロイドが、エレメントXと寒冷低気圧の前に姿を現した。

一人の永遠の騎士団所属の者が逃げて行つた。

ようやくみんなが到着した。

闘いが始まった。

アングルⅡ水素は、先回りをした。

其れに沿って、フリッピーと南極ちゃんが移動した。

ケ빈は、モコのアンドロイドを破壊していった。

「水色のモコは、どれぐらい片づけたんだ？」

「僕は、ざっと350体ぐらいですかね。」

台風の狂気は、青と赤の剣を抜いて、切り裂いていた。

うちはドルレインは、光遁術で混乱させていた。

レインボーニヨロモは、真の力を出していた。

ベン・テニスンを刀で刺し殺すはずが、ベンがいなくなっていた。

壁に刀が刺さっていた。

「貴様、誰だ？」

「拙者は、アングルⅡ水素。ベン・テニスンを殺そうなんて卑劣なものよその断罪、この拙者がルシファーセイバーで斬ってくれる。」

フリッピーと南極ちゃんは、二人でベンを運んだ。

しかし、気絶している時間は、あと3分で切れる。

アングルⅡ水素は、必殺の攻撃をくらわした。

ハルマゲドンザン
「黙示録撃斬」

地面にひびが入る。そして、永遠の騎士団の右半身と左半身が引き裂かれた。

地面は、もの凄く深くえぐられた跡が残っていた。

ベンは、目を覚ました。

どうやら拉致された時、右腕を脱臼されたらしい。

幸い、全治1週間と言う為、エイリアンヒーローのパワーの名残がつき始めていることを知り始めた。

フレイキーとフリッピーは、最近カドルスとギグルスよりも一緒にいることが多い。

オンボロボスの点検をスニフルズと一緒にしていた。

フリッピーは、ビーム砲の微調整をしていた。

フレイキーは、写真を見つけた。どうやら自分の妹であるアリスとその恋人であるトゥーシーの初デートの時に撮った写真だ。

姉妹が其々、別の男性を好きになることは珍しい。

フリッピーは、レーダーを見ていたら、何かがこっちに向かってくる。

其れは、なんなのかは、確かめてみないと分からなかった。

フレイキーは、リフティが落してしまった言っていた財布を探していた。

自ら、バイトで集めたお金で買ったらしくとてもお気に入りらしい。

地味な茶色だが、安いのに安物とは思えない材質は、フレイキーも一度触ったことがある。

フレイキーは、座席の下をよく確認したら、見つけた。

「これだ！」

フリッピーは、外に出ていた。

三人の少女が、苦しんでいた。

「君たちどうしたの？」

「赤色の……モコが……私……達を……襲って……来たの。」

次回 淋無喜有」始まりの篇 第十話 セルインジー・キリスト
人間界に来る

淋無喜有」始まりの篇 第九話 ベン・テニスン殺害計画パート1（後書き）

まだまだ続くよ。

淋無喜有」始まりの篇 第十話 セルインジー・キリスト人間界に来る

前回のあらすじ

ベンを誘拐した真犯人は、永遠の騎士団だった。闘いは、不覚にも永遠の騎士団の敗北に終わっていたように思えたが、三人の少女が倒れていた。赤色のモコは何を企んでいるのか？永遠の騎士団の存在が今後の展開にどう影響するのか？

赤色のモコは、ハイブリードにとんでもないことを言う。

「なに、お前が言う異世界には、厄介な神がいるだと。」

「そうです。」

DNAリアン達も警戒していた。

淋無喜有」始まりの篇 第十話 セルインジー・キリスト人間界に来る

3人の少女は、全く別の場所から来たみたいである。

フレイキーは、3人の少女を見てある事を思い出した。

「そういえば、3人のうち2人は、出会ったことがあります。確か、キッズウィンさんとフロッグマンさんが起こした異変、あっ東方寒冷化の時、僕も弾幕戦に参加したんです。結局、フリッピーさんも負けちゃったけど。」

フリッピーは、少し照れていた。

「フリッピー君は、女の子に弱いのかねえ。」

スプレندیドが、フリッピーを苛立たせる発言をした。

「るせえ！軍録 カリブの煉獄！」

スプレندیドは、津波のような弾幕に気絶させられた。

スニフルツズは、3人の少女が右腹を押さえているところを見て仰天していた。

「スニフルツズどうしたの？」

「この女の子達、大怪我してる！」

急いで手当をしたギグルス、水色のモコは、棒結界が刺さっていたことを知る。

「赤色のモコが3人の少女をここまでやるとは。」

ケ빈は、水色のモコに言った。

「あの少女達は、どこから来たんだ？」

「幻想郷、僕のいる閻幻想郷とはまた違う場所です。」

ケ빈は、呆れていた。

「宇宙ならまだしも異世界がたくさんあるなんて目が眩むぜ全く。」

「でも、モコの言っている言葉は、真実の一つだ。」

台風の狂気そう言った。

「おやおや、台風の狂気。寒冷低気圧とお茶を楽しんでたんじゃなかったんですか？」

「いいタイミングで終了した。」

「復唱要求だ、宇宙の数と異世界の数は比例する。」

「自然の真実、確かに宇宙の数と異世界の数は比例する。」

ケビンが一瞬だけ違うアニメの人のように思えた。

闇幻想郷では、セルインジー・キリストが困っていた。

「甚だしい者達が来たものだ。」

「仏教魔法を平気に塞ぐとは奴等はいったい何者なんだ。」

神奈子と諏訪子も少しボロボロな姿になっていたが、無事である。

「あれ、早苗ちゃんがない。」

セルインジー・キリストは、少し卒陀に闇幻想郷の留守番を頼んだ。

セルインジー・キリストと神奈子と諏訪子で、人間界に行くからで

ある。

牟陀は、仏教魔法を獲得したものであるため、古から続く修行には、よく参加している。

「セルインジー・キリストに留守番頼まれたらしょうがない。こちらで調べるものを出しておくか。」

人間界

セルインジー・キリストが配管工基地にやってきた。

「ここって何処？」

「人間界だ。しかも配管工と言う作業員たちがいる場所。と言っても配管工ではないメンバーもいるがな。」

フレイキーとトゥーシーとアリスがセルインジー・キリストを見て敬いの敬意を行つた

「貴方もなかなか信仰力があっていいわね。」

神奈子が嬉しそうに言った。

フレイキーは、急いで医務室のほうに向かった。

諏訪子と神奈子は、衝撃を受けた。

早苗と霊夢と魔理沙が同じ場所をやられて重傷を負っていることに。

「一体、誰がこんなひどいことを。」

セルインジー・キリストは、赤黒い血が着いた棒結界を見た。

「これは、赤色のモコの仕業だな。」

フレイキーは、不安そうな表情を浮かべていた。

ところ変わって、永遠の騎士団の一人が植物の兵士であるトウダイグサ・スカーレット大佐と対決をしようとしていた。

「君の持っている武器は、エイリアンテクノロジーというものなのか。」

「其れがどうした!」

「植物のテクノロジーが上だからさ。」

トウダイグサ・スカーレット大佐は、エイリアン・テクノロジーの武器を引き裂いた。

「平和を壊すなら、貴様を殺す。俺と取引だ。」

取引とは一体何なのか？

フレイキーは、人間の姿になっていた。

フリッピーは、ある物を見た。其れは、赤色のモコがこちらに接近しているからである。DNAリアンもいた。

ハイブリードは、まだいないようである。

カドルスとトゥーシーはちょっとだけある作戦を考えていた。

キモエリザベスを囚にする。本人を困らせる作戦である。

「ちょっと、楽しくやろうよ。」

「そうだね。」

次回は、淋無喜有」始まりの篇 第十一話 ハイブリードVSセル
インジー・キリスト

淋無喜有」始まりの篇 第十話 セルインジー・キリスト人間界に来る（後書

まだまだ続く。

淋無喜有」始まりの篇 第十一話 ハイブリードVSセルインジー・キリスト

前回のあらすじ

大怪我をしている三人の少女達。其の正体は、博霊霊夢と霧雨魔理沙と東風谷早苗だった。セルインジー・キリストが人間界に降りてきて、事態は急展開を迎えた。

セルインジー・キリストは、棒結界を解析していた。

神奈子と諏訪子にとっては、赤色のモコが存在が憎くなった。

「私の非想天則で倒してやる。」

「諏訪子、残念だが、非想天則を使うと人間界が騒ぎになる。」

「じゃどうすればいいの?」

セルインジー・キリストは、十字架に自らの意思を通して投げた。

十字架は、富士山山頂のハイブリードのいる基地を襲った。

「十字架が、襲ってきたぞ。」

ハイブリードが破壊した十字架は、セルインジー・キリストには、見えていることに気付きもしなかった。

「ハイブリードを確認した。」

淋無喜有」始まりの篇 第十一話 ハイブリードVSセルインジー・キリスト

外は、どうやら戦いが終わったようである。

ベンも、DNAリアンに関しては、弱すぎることは知っているが赤色のモコは、強い。

トウーシーは、あることに気付いた。

「ハイブリードがこっちにくるよ。」

セルインジー・キリストは、スペルカードを利用して、ハイブリードの動きを止めた。

「罪滅 ロザリオ 嘲笑いの十字架」

闇色の十字架からビーム型弾幕を解き放った。

ハイブリードは、避けまくっていた。

「下等生物の一人か？」

「ハイブリード、お前が高等生物と誤解しているも神である吾には、実に不愉快。この場から消えうせたらどうだ。」

ハイブリードは、セルインジー・キリストに殴ろうとしたが、十字架を盾にして防いだ。

セルインジー・キリストは、拳でハイブリードを殴った。

その時に十字架の振動で、ハイブリードを転がした。

「この野郎。」

ハイブリードは、エイリアンテクトロジード、セルインジー・キリストにミサイルを発射したが、十字架の盾にまた塞がれてしまった。

「罪森 熱帯雨林のような罪達」

これまでの弾幕とは違った弾幕だ。

しかも、ハイブリードにとっては不利な状況。

ハイブリードは、倒されていた。

セルインジー・キリストの強さ是有り得ないものである。

神とはいえ、少し卑劣なものである。

其れが原因でキリスト教の信仰者が彼等を追いだした。

「旧約聖書をちゃんと読んだほうがいいぜ。」

スプレندیードは、少し苛立ちを見せた。

「キリスト教から追い出された神様に言える立場かよ。」

「聞こえませーん。吾は、自然教の神様ですから。嫌いになられるのは当たり前ですよ。この？ヒーロー！」

「其れは、チルノだろうが！」

本人がこの言い争いを聞いてたら割り込みそうだ。

なにはともあれと言いつつ、フレイキーとフリッピーは、人間界で初めてのデートを開始し始めた。

閻幻想郷では、惨劇で邪魔ばかりされてきたため人間界で楽しむことを決めた。

フリッピーの頬は、少しずつピンクになっていた。

フレイキーは、閻幻想郷のテクノロジーで作られた音楽を聞く装置を手にした。

次回 淋無喜有」始まりの篇 第十二話 マイク・モーニングスタ
ーの復讐

淋無喜有」始まりの篇 第十一話 ハイブリードVSセルインジー・キリスト

次回は、4本立てで行きます。

淋無喜有」始まりの篇 第十二話 マイク・モーニングスターの復讐（前書き）

4本立てスタート！

淋無喜有」始まりの篇 第十二話 マイク・モーニングスターの復讐

前回のあらすじ

セルインジー・キリストとハイブリッドの直接対決。どちらも強い
ため、勝利は分らないように見えたが、神は宇宙人を殺すぐらい
強い為、セルインジー・キリストの勝利に終わった。一方、フリッ
ピーとフレイキーは、デートを開始した。人間界でのデートは、最
後まで行くのだろうか？

淋無喜有」始まりの篇 第十二話 マイク・モーニングスターの復讐

フリッピーとフレイキーは、海浜公園で遊んでいた。

とても楽しそうである。

キッズウィンは、若干退屈であった。

どうやら、フリッピーがトイレとかに行っている最中などにフレイ
キーが襲われたらということを心配して、ボディーガードとして、
キッズウィンとケビンとベンとトウーシーと寒冷低気圧を派遣した。

「ケビン、今のところいませんね。」

「寒冷低気圧、ちょっとだけ質問していいか？」

「いいですけど何か？」

「台風の狂気と一緒にいてどれぐらい経つんだ？」

「自然の真実、台風の狂気様と私が一緒にいるのは300年前ほどです。」

「自然の真実を使うとは。」

「このことは、台風の狂気様には内緒ですよケビンさん。」

「分かったよ。」

ゾンビのような表情で、海浜公園をじっと見ている存在がいた。

憎悪感をもの凄く出していて、捕まえている赤色のモコとDNAリアンの力を抉り取っていた。

「この力は、此の僕を幸せにしてくれる。」

フリッピーとフレイキーのデートは無事に終わった。

「楽しかった。」

ベンは、隠しカメラをコンピューターにつないだ。

「どうしたんだ、ベンそんなカメラを持ち出して？」

「そういえば、殺気を感じたんだ。この映像を見て。」

「人か？」

「空中にいる人の姿この映像を限界まできれいにすると！」

力がこもるように言ったベン。

ケビンとグウエンは驚いていた。

「まさか、あの人まだ生きていたの？」

「死んだと思っていたあのマイク・モーニングスターがこんなところに来てやがったのかよ！」

「僕だって、最初は目を疑ったんだ。でも本人だよ。赤色のモコとDNAリアンから力を吸収している。」

水色のモコは見ていた。

「僕には、彼の能力がいかに関違っているかを見ることができませんでした。」

ケビンは水色のモコに質問をした。

「そのことがなぜわかるんだ？」

「僕の能力には、その人物の能力が善業として役に立つか悪行と言う腐り者なのかを判断できることができます。」

「俺の能力はどうだ。」

「口調は、悪いですが、能力は真実を追い求めたり人助けをしたりと善業に凝っています。よって悪い能力ではありません。」

ケ빈は、少しだけ納得していた。

カドルスは、マイク・モーニングスターを見つけた。

「君が来ることは、分かっていたからおまえを倒す。」

マイク・モーニングスターは、嘲笑うのうにしゃべった。

「貴様の力、すごいね僕の栄養分になりなよ。」

突然結界が、マイク・モーニングスターを覆った。

「何だこれは？」

水色のモコは、究極の能力を持つ。

「あっちのウサ公よりも、こっちの水色の球体のほうがもの凄いエネルギーを持っているぞ其の力もらったー！」

マイク・モーニングスターは、水色のモコを触ったが力を吸収できなかった。

「吸収できないだとなー！」

水色のモコは言った。

「醜いパワーを持つ者は僕のエネルギーを吸収することができません。善業という鎧を持つ者には僕のエネルギーが来ます。ケ빈さん僕の頭に手を置いてください。」

「よしっ、行くぞ。」

ケビンにとっては、もの凄い力を手に入れた。

「すげーこれがモコの無限の力か。」

「僕の指示通りに動いてください。」

「分かったぜ。」

水色のモコの指示通りにケビンは、動いた。

ケビンは、水色のモコのおかげで彼の無限の能力を利用して喜んでいた。

しかしかなり強力だけあって、身体中の筋肉が悲鳴を上げていた。

「痛てー、強力なパワーなのはわかるが、これはきついで。」

地面に這い蹲っているマイク・モーニングスターを見ているモコは、雲を作り出して、槍を降らした。

マイク・モーニングスターは、多数の槍で身体を貫かれて死亡した。

水色のモコは、醜い力を発揮しない。

ケビンは、しばらく動き辛かった。

「モコの力を吸収するからよ。」

「あいつを倒すには、それしかなかったんだ。」

一方、ハイブリードは一体だけであった。

「忌々しい害虫共め、作戦を立てるのに時間がかかる。」

邪悪な組織がまだある。其れは、竺という組織である。

次回 淋無喜有」始まりの篇 第十三話 ナッティーに芽生えた能力

淋無喜有」始まりの篇 第十二話 マイク・モーニングスターの復讐（後書き）

まだまだ続くよ。

淋無喜有」始まりの篇 第十二話 ナツティーに芽生えた能力（前書き）

意外な能力です。

淋無喜有」始まりの篇 第十三話 ナッティーに芽生えた能力

前回のあらすじ

フリッピーとフレイキーのデート大成功と思いきやマイク・モーニングスターがあらわれてしまった。闘いは激しい展開を迎えて終了した。しかしなおも続くハイブリードの野望そして新たな邪悪組織その名は、竺であった。

「俺は、ドクター・アニモだ。これよりとある場所を侵略する。」

「そこはどこですか？」

「幻想郷に行くぞ。」

淋無喜有」始まりの篇 第十三話 ナッティーに芽生えた能力

ベンとグウェンは、赤色のモコと対決していた。

ベンは、ビッグチルに変身して、赤色のモコを凍らせていた。

グウェンは、弾幕のように濃いピンク色の円盤を投げまくった。

闘いは、終結した。

赤色のモコは、退却したためである。

配管工基地では、三人の少女の怪我が完治したため、フレイキーは、一つだけ質問した。

「このエイリアン知ってますか？ハイブリードと呼ばれる種族です。」

「知らなかった。私達、こいつに攻撃したけど全く歯が立たなかったわ。」

霊夢は、そういうとケ빈は、ある事に気付いた。

「ハイブリード、ベン確か、お前が出会ったハイブリードがいたな。」

「ラインラシル3世のこと？」

その時、ラインラシル3世から通信が入った。

「久々だな、ベン・テニスン。それと仲間たちか。」

「やあ、ライニー。元気だった？」

「元氣も何もあの惑星に開いた穴に落っこちて気がついたらわけのわからない場所に切っちゃってよ。」

魔理沙は、ここがどこだか分かってしまった。

「もしかして、魔法の森、幻想郷だ！」

「ここ、幻想郷という場所なのか。」

「それより、僕に通信してきたということは、緊急事態と言つこと

かい？」

「ああ、いい知らせと悪い知らせがある。いい知らせは、きみのおじいさんであるマックス・テニスンと3人の少年エイリアンがいる。」

「おじいちゃんとピアス達のことだ。ナルボイドから幻想郷ってどういうことだろうか？時空がおかしくなっちゃったのかな？もうひとつ悪い知らせは？」

「ドクター・アニモと言うやつ、宇宙に名を売られているだろ。」

「アニモ知っているけど？」

「そいつが幻想郷に来ているんだ。最悪なことに危うく出くわすところだった。」

ラインラシル3世との通信が切れた。

ベンは、幻想郷に行く方法を霊夢に聞いた。

「幻想郷に行く方法教えて？」

「大丈夫？貴方達の中に能力はあるの？」

「心配しなくても大半の者達が能力を持っている。」

幻想郷行くのには、博霊神社へ行かなければならないのだが、DN
Aリアンが占拠していた。

「こんなところにもいたのか、悪い奴が！」

DNAリアンは、攻撃を開始した。

水色のモコは、結界で次々と覆って爆破させていった。

うちはドルレインは、時空でDNAリアンを押し潰していた。

「闇に誘われるがいい。」

ナッティーの驚くほどの能力が登場した。

巨大な棒付きキャンディーをDNAリアンに叩きつけた。

「僕的能力でもくらえー！」

ナッティーの強さは、計り知れないものであった。

DNAリアンは、倒されたところで幻想郷に到着した。

ラインラシル3世と出会ったベンは、喜んでいた。

また本人も喜びがあった。

「ベンの新しい親友みたいな関係になっているよ。」

ラインラシル3世は、気にかけていることを言った。

「俺の同じ奴等は、まだベコポンを侵略しようとしているのか？」

「侵略をしようとしているよ。」

カドルスは、嫌な予感を感じていた。

「こつちに誰かが来る。」

「アニモの手下かな？」

どうやら烏天狗の一人であるようだ。

「文じゃない！右腕を怪我しているわ。」

DNAリアンは逃走をしていた。

「まずい、今のマックス・テニスンに捕まったら殺される。」

マックス・テニスンは、DNAリアンを弾幕の檻に閉じ込めた。

それよりも、ドクター・アニモにもとんでもない能力が付き始めていた。

次回 淋無喜有」始まりの篇 第十四話 配管工にやられてすぐ解散！アニモの野望は破れたり！ぱーと1

淋無喜有」始まりの篇 第十二話 ナッティーに芽生えた能力（後書き）

まだまだつづくよ。

淋無喜有」始まりの篇

第十四話

配管工にやられてすぐ解散くアニメの野望

15話目と17話目と18話目にこのお話になります。

淋無喜有」始まりの篇

第十四話

配管工にやられてすぐ解散くアニメの野望

前回のあらすじ

竺という組織が遂に行動開始した。そんな中、配管工基地で待機中のベン達にラインラシル3世というハイブリードから通信が入った。マックス・テニスンがなんと幻想入りしていたことが発覚！そして竺のリーダードクター・アニメという人物までも幻想入りしてしまう。はたしてドクター・アニメを幻想郷から追い払うことはできるのだろうか？

淋無喜有」始まりの篇 第十四話 配管工にやられてすぐ解散くアニメの野望は破れたりくパート1

ベン達は、幻想郷に着いてから少しわからない部分があった。

「そういえば、俺の能力が異常に反応しているんだが。」

ケビンの言った言葉は、ほかのみんなをびっくりさせていた。

カドルスは、何かを見ていた。

竺のメンバーの一人がこっちにやってきている。

「こっちに誰かが来るよ！」

寒冷低気圧は、安全なところに移動してみんなもそのあとに続いた。

「私が、相手になります。」

ヴィルガクスと同じ種族の一人、リストラクスという。

リストラクスは、寒冷低気圧を片手で潰そうとしたが、寒冷低気圧は其れを片手でつかんだ。

「あいつ、強い！」

「ぬるいですね。」

「何だと、貴様！」

「私は、貴方を凍らせて殺したいものですね。」

「腕が凍り始めたやめろー！」

リストラクスは、氷漬けにされてしまった。

「内臓も、凍ってます。」

魔理沙は、寒冷低気圧に言った。

「そういうグロテスクなことを平気に言うのは？」

「おっとこれは失敬。」

「あいつの擾乱だ。許してやれ！」

台風の狂気は、少しだけ駄洒落を言った。

しかしみんなは聞いてなかったため、ガッカリしていた。

闇幻想郷

卒陀は、新たに魔界から逃げ出した。人物を確認した。

「これは、リアディ・剣丹。破壊活動に対する危険性は、level 16の恐さ。更に彼は、人間界に移動して、密約を行っているという悪い奴、しかもハイブリードとドクター・アニモと行動している。」

卒陀は、嫌な気分になった。

無線でセルインジー・キリストに通信をつないだ。

「セルインジー・キリスト、まずい情報が入りました。」

幻想郷

「リアディ・剣丹がすでに人間界にいたのかよ。」

卒陀の通信を切ったセルインジー・キリストは、驚いた。

「やっぱりまずいことになっていたのか。」

溜め息をつきながらそう言った。

台風の狂気にとっては、最悪な出来事になった。

全員を囲むように、赤色のモコが囲みを作り出した。

ケビン達は、戦闘態勢となった。

次回 淋無喜有」始まりの篇 第十五話 配管工にやられてすぐ
解散〜アニモの野望は破れたり〜パート2

淋無喜有」始まりの篇

第十四話

配管工にやられてすぐ解散くアニメの野望

まだまだ続く！

淋無喜有」始まりの篇

第十五話

配管工にやられてすぐ解散

今回はこれで終了。

前回のあらすじ

幻想郷に入り込んだカドルス達に、厄介な情報が入ってしまった。
リアディ・剣丹と言う人物がドクター・アニモとつるんでいることが発覚。カドルス達に赤色のモコに囲まれてしまった。

水色のモコは、考えていた。

「僕の作戦は、色々あるんですが？」

ケ빈は、土の成分を吸収して自分のものにした。

フレイキーは、怖がっていた。

キッズウインは、電撃を放った。

「サンタ・サンダーα」

キッズウインの電撃のパワーがいかに強いかわかる。

赤色のモコの死体がたくさん出ていた。

DNAリアンは、倒されていた。

マックス・テニスンとピアス達は、争いが起こっている場所へ移動開始した。

ドクター・アニモは、手を木に当てた途端、木が根こそぎ倒れた。

アニモは、笑っていた。

「これでいけますねアニモ様。」

「ああ、e i g h t e i g h t。私を舐めるものだところにはない。」

淋無喜有」始まりの篇

第十五話

配管工にやられて

すぐ解散くアニモの野望は破れたりくパート2

赤色のモコは、全滅していた。

カドルスは、台風の狂気とうちはドルレインに聞いた。

「この幻想郷、なんか変だよ。なんだか、怖い感じがしている。」

霊夢も気にしていたのは、西の方角にドクター・アニモがいることである。

「あんなところに。」

ドクター・アニモは、彼等を見つけた。

「お前ら、行くぞー。」

カドルス達に襲いかかろうとした途端、四人の人物が、一瞬でカドルス達を違う場所に移した。

ベンは、マックスと久しぶりに会えてうれしかった。

ラインラシル3世とともにどうやら、この場所でドクター・アニモに関する情報を手に入れようとしていた。

「ライニーは、何か分かった？」

「相手側には、リアディ・剣丹がいるならまずい相手になりそうだな。」

人間界が心配になってきているグウェンは、二手に分かれる作戦を考えていた。

寒冷低気圧とテリハニシキソー一匹狼兵とフロッグマンとケビンとピアスは、人間界に行くことにした。

残ったみんなで作戦を考えていた。

ドクター・アニモがつるんでいるエイリアンや妖達は、何を企んでいるか突き止めるしか方法がない。

一方、人間界では、ハイブリードの動きが変な感じになりつつあった。

春日部に怪しげな影が近づき始めていた。

次回　淋無喜有」辻褄合わずの篇　第一話　襲う闇夜

淋無喜有」始まりの篇

第十五話

配管工にやられてすぐ解散、又

次回もお楽しみに。

淋無喜有」辻褃合わずの篇 第一話 襲う闇夜（前書き）

三本立てで行きまーす。

淋無喜有」辻褃合わずの篇 第一話 襲う闇夜

前回のあらすじ

ドクター・アニモの襲来に備えて、闘いの準備をしていた。そして、人間界のことであつてか、二手に分かれることを決意した。ドクター・アニモの企みを打ち砕くことができるのか？

ベン達は、紅魔館にやって来ていた。

霊夢は、ある人が来ることを見た。

トウダイグサ・スカーレット大佐とタカトウダイ中佐である。

「ああ、霊夢か。最近、わけのわからぬことになっていてよ。」

「そんで、警戒態勢を中国じゃなかったなんか名無しのごんべさんの代わりに俺達が警護している。もちろんトウダイグサのニシキソウ小隊も警護している。」

カドルスは、ロープで縛っている緑色の物体を見かけた。

「助けてほしいであります。」

フリッピーは、一瞬自分と似たような階級の香りがしたことを確認した。

ロープをほどいたトウダイグサ・スカーレット大佐は、そいつの名前を聞いた。

「ケロロ軍曹であります。というより、吸血鬼はね凄くきつそうな匂いが、吾輩よりも階級が上？」

「トウダイグサ・スカーレット大佐だ。軍曹よりも上のランクだが、それがどうした。恐いのか、ケツケラケラ。」

トウダイグサ・スカーレット大佐の下品な笑い方にフリッピーが吐きそうになった。

「フリッピーも、元軍曹でありましたか！」

「僕は、退役軍人になったけど、いくつか伝説を残したということ、軍人を辞職したんだ。」

「そつえば、俺の弟であるナットウダイも軍曹だな。」

淋無喜有」辻褄合わずの篇 第一話 襲う闇夜

トウダイグサ・スカーレット大佐は、平和に関しては執念深いだけでなく友達と思っている。その平和を壊すなら壊したものを虐殺していく。

平和にしないと殺されちゃうと言われている屋敷に13人の人物が入ってそこで言い争いとなった時、13人全員がさまざまな方法で殺害されていて証拠となるものがないことから、平和を守る者が第二のU・Nowenとなっていた。

それがトウダイグサ・スカーレット大佐だと明かされるには、もの凄い年月を経て明らかになった。

タカトウダイ中佐は、ドクター・アニモに関する情報をラインラル3世から聞いたと言っている。

「俺の情報も役に立つだろ。ベン・テニスン、君と出会ったことで俺もハイブリードというエイリアンの種族がいかに下劣か分かる。」

「でも、ライニーもハイブリードだけだね。」

「あつ、そうか。俺は、絆と言う恵まれた欲を持っている。他の奴らは、ただ侵略するという欲しかないからな。」

ニシキソウ准尉が、ドクター・アニモを目撃した。

「いたぞ！イリオモテニシキソウ上等兵は、大佐殿に報告を。」

「了解！」

人間界

寒冷低気圧達は、春日部に不審な影が映っていた。

それは、閻幻想郷の魔界にいる危険level3の者達であった。

ケ빈は、倒す気でいたが、彼らの危険性を察知した寒冷低気圧は、配管工基地で待機することにした。

閻幻想郷では、異常な量の魔界の妖が出ていることに卒陀は、驚いていた。

幻想郷

ハードカーフフという魔界の妖怪。

危険level3・5という者。

闇幻想郷の魔界出身なため、能力は恐い感じがある。

「作戦を立てるしかないな。」

トウダイグサ・スカーレット大佐は、何かを思いついた。

水色のモコは、カドルスにある相談をした。

「カドルスさん、僕に良い考えがあります。」

カドルスは期待の表情していた。

次回 淋無喜有「辻褃合わずの篇 第二話 配管工にやられてすぐ
解散」アニメの野望は破れたり」パート3

淋無喜有」辻褃合わずの篇 第一話 襲う闇夜（後書き）

まだまだ続くよ。

淋無喜有」辻褃合わずの篇

第二話

配管工にやられてすぐ解散、アニメの

ミニコーナーが付きました。

淋無喜有」辻棲合わずの篇

第二話

配管工にやられてすぐ解散、アニメの

淋無喜有」辻棲合わずの篇

第二話

配管工にやられてすぐ解

散、アニメの野望は破れたり、パート3

モコの考えは、こうである。

「ハードカーフ対策には、前提が必要なんです。」

ベンは、水色のモコに聞き出そうとした。

「その策は何か教えて？」

「相手の弱点を探る必要性が見えてきました。」

その弱点を突く作戦とは？

ミニコーナー

モコート・ディセスティア・ヴァンスー・フライング・フライ
種族 U M A（未確認生物）

能力 無限の力を多彩に扱う程度の能力

性別 不明

テーマ曲 未確認生物のかわいらしさ100%

モットー 醜い欲を殺していくことが僕にとって美しい欲である。

「相手は、僕のピラニアが弱点なのです。」

ケ빈は、あのことが分かった。

「あの黒いピラニアを、そいつに襲わせる。という作戦か。」

「うまくいくという保証はあるとは言えます。僕に任してください。」

作戦内容はこれだ。モコが、黒いピラニアを解き放った後、ハードカーフを逃走させているところをスワンプファイアーで、威嚇攻撃した後、台風の狂気が殴って、結界で肉体と精神を破壊する。という残忍な方法である、

此の作戦成功率は、高いようだ。

水色のモコが黒いピラニアで、ハードカーフを怯えさせた後、スワンプファイアーが威嚇攻撃をした。

此処までは、順調だが、eight eightとドクター・アニメとリアディ・剣丹がやってきてしまった。

竺のメンバーであるらしい。

「これは、まずいことになってきたぜ。」

キッズウィンとフログマンは、自らの能力を刀に変えた。

「サンタ・サンダーブレード!」

「ブラックホールセイバー!」

「そんなもので、わしを倒せれると思っているのか?」

「それは、やってみないと分からない。」

トウダイグサ・スカーレット大佐は、e i g h t e i g h tと対決になった。

「平和 首なしの平和」

弾幕がe i g h t e i g h tを襲おうとしたが、かなりのスピードで避けていった。

「ならば、これならどうだ。禁忌 最期の戦争」

e i g h t e i g h tには、グレイズ程度にしか過ぎなかった。

「平和 平和を刻む時計」

e i g h t e i g h tは、避けていたが、左腕をやられた。

「平和 そして誰もいなくなる？」

禁断の弾幕で、e i g h t e i g h tをバラバラ死体にさせた。

フリッピーとケロロは、怖がっていた。

「相当強くて残酷なうえ、平然と死体を喰っているでありますー！」

「恐いよー！裏来ないで。」

フレイキーは、リアディ・剣丹に捕らわれた。

「貴様ら、おとなしくしないと、この少女の首が落ちるぞ!」

と言った途端、棒がリアディ・剣丹の背中に刺さった。

赤色のモコだ。

「よりによって厄介な奴が来るとは。」

ケ빈は、愚痴らしき言葉を吐いた。

マックス・テニスンは、その間にドクター・アニモに攻撃を仕掛けた。

カドルスは、リアディ・剣丹を右腕の剣で、心臓を抉った。

「くそが……」

「僕ってすごい!」

フリッピーは、フレイキーを助けた時、原型とはいえ、思いっきり胸に触れてしまっていた。

「フレちゃん、ちょ・と」

「どうしたんですか? フリッピーさん。」

「何でもないよ。」

ミニコーナー

うちはドルレイン

種族 人間

能力 光遁・火遁・時空を自由に操る程度の能力

性別 男

テーマ曲 闇影として the dark leader

モットー 自ら闇の者。そしてその長として守るべきものを守る。

ハードカーフは、魔理沙に攻撃したが、キッズウィンとフロッグマンの持つ剣によって下半身と上半身と首を切断した。

残るは、ドクター・アニモだけである。

「頼むよおじいちゃん。」

次回 淋無喜有「辻褄合わずの篇 第三話 配管工にやられて
すぐ解散」アニモの野望は破れたり」パート4

淋無喜有」辻褃合わずの篇

第二話

配管工にやられてすぐ解散、アニメの

まだまだ続くよ。

淋無喜有」辻褃合わずの篇

第三話

配管工にやられてすぐ解散、アニメの

原作が一つ増えました。

淋無喜有」辻棲合わずの篇

第三話

配管工にやられてすぐ解

散、アニモの野望は破れたり、パート4

ドクター・アニモは、マックス・テニスンを襲おうとした途端、マックス・テニスンの棒が、弾幕に変わった。

「これは、スペル！」

霊夢が言った。どうやら幻想郷の力らしい。

カドルスとフレイキーとフリッピーは、人間界から通信が入った。

「ケビン、どうしたの？」

「ヤバいことになったぞ。妖の数が、もの凄い数だ。しかもDNAリアンもやってきている。」

ロススラダムには、ハイブリードがいた。

ケビン達は、日本にいたので大丈夫だが、一部がまだいた。

マックス・テニスンは、ドクター・アニモを退散させた。

マックス・テニスンとラインラシル3世とヘレン達は、幻想郷に残ることにした。

人間界に戻った一行は、急いでケビン達に向かっていった。

「できるだけ、急ぐぞ。」

「ああ！」

ミニコーナー

トウダイグサ・スカーレット大佐

種族 吸血鬼

能力 平和を作り出す程度の能力・平和を壊すと全てを壊す程度の能力

性別 男

テーマ曲 残酷敵軍歌／紅き平和願望七条約／

モットー 平和を守らぬものは、全てを倒す。平和を生み出してそして守り抜く！

ベンは、ジェットレイとなって、DNAリアンをやっつけていた。

水色のモコは、いち早く配管工基地に入った。

トウーシーの能力が妖怪たちを襲った。

闇幻想郷

卒陀は、奇妙な者を発見した。

「アメリカ、ロススラダムにこんな基地があるのか。しかもハイブリッドがこんなにあくさんいるとは。セルインジー・キリストに報告しよう。」

人間界

妖怪とDNAリアンと赤色のモコを全員倒したベン達は、疲れきっていた。

配管工基地で、水色のモコと台風の狂気とテリハニシキソウ一匹狼兵は、起きていた。

「何か、変だな。」

「ハイブリッドの企みは、終了しきってないみたいだ。」

「それに、トウダイグサ・スカーレット大佐殿は、闇幻想郷に行っている。」

「なにをしに行ったんだんですか？」

「大佐殿の氣にしていることだ。」

闇幻想郷

「やはり、ナチスがいたか。」

「まっ、封の軍団がいつ攻撃を仕掛けてくるかは分からないがな。」

牟陀と一緒にいるトウダイグサ・スカーレット大佐は思惑を感じていた。

人間界

金道と早澤が浅井山に呼ばれた。

「ベン・テニスンと組んでくれ。少し厄介な出来事が起こった。」

「それは、なんですか？浅井山殿。」

「風間トオルをさらったエイリアンがいる見つけ次第、ナルボイドにぶち込め！これは命令だ。」

「了解しました。」

浅井山が焦っていた。

其のエイリアンは、なんとハイブリードであった。

次回 淋無喜有「辻褃合わずの篇 第四話 特別任務〜風間トオルを救い出せ〜

淋無喜有」辻褃合わずの篇

第三話

配管工にやられてすぐ解散、アニメの

次回もお楽しみに。次回も三本立て

淋無喜有」

辻褄合わずの篇

第四話

特別任務く風間トオルを救い出せく

三本立て行きまーす。

淋無喜有」 辻褃合わずの篇

第四話

特別任務／風間トオルを救い出せ

淋無喜有」 辻褃合わずの篇 第四話 特別任務／風間トオル
を救い出せ

ハイブリードが、風間トオルを誘拐した理由は今のところ不明だが、緊急事態である。

金道と早澤は、ベンのいる配管工基地に移動した。

セルインジャー・キリストは、ベン・テニスン呼び出した。

「えっ、配管工部隊の金道と早澤が何の用？」

「ベン・テニスン。大変な事態だ。聞いてくれ風間トオルが、ハイブリードというエイリアンに拉致された。急いで足取りを追いたい。」

早澤は、そう言った。

ケビンとグウェンと水色のモコとセルインジャー・キリストと一緒に行くことになった。

足取りに関しては、カドルスが探していた。

「カドルス、僕はちよつとある場所に行ってくるね。」

キッズウィンとフロッグマンは、東京湾に何かあると感知して移動をし始めた。

彼等は、東方寒冷化の異変を起こした犯人でもあり、この異変を先に気付いた者でもある。

闇幻想郷の中でも、彼らのような絆は、あまりない。

相棒クラスと言ったところである。

フロッグマンとキッズウィンは、東京湾にある敵のことを思い出した。

「もしかして、此の武器は、米苗ハーブ！」

「電破 電離層大混乱」

電離層が大混乱して、東京のシステムが麻痺をし始めた。

それだけでなく、配管工のテクノロジーも麻痺し始めていた。

「何が起こったんだよ。」

ケビンがイライラしていた。

通信も出来ない。

魔理沙が、心配していた。

「私、キッズウィン達のところ言ってくるぜ。」

キッズウィン達は、米苗ハーブの弾幕を避けていた。

ミニコーナー

米苗ハープ

種族 超危険兵器

性別 男

能力 電離層を破壊する程度の能力

テーマ曲 電離層破壊劇場 s a d i s t i c k i l l i n g

モットー 殺人兵器ではなく電離層破壊兵器だ！

米苗ハープを覚えているだろうか、東方地球危で登場した。ハープという兵器が、幻想入りして、妖になった者。電離層を破壊することによって、どんなスペルカードの弾幕などを撃ち消したり封殺したりする。かなり強い相手。

そのあとは、八雲紫が4次元刑務所に入れていたのだが・・・

「こいつ、脱獄したのかよブラックホールキャノン！」

米苗ハープは、電離層の一部を破壊した。

「ブラックホールキャノンを封殺しやがった！」

「電離殺 電離層を殺すのは私だっ！」

弾幕が、伸び縮みしながらキッズウィン達を襲いかかりそうになった時、一筋の光で封殺した。

「恋色ハイパースパーク！」

キッズウィン達は、避けた結果、相殺となった。

「米苗ハーブ！貴様の相手は、この私だ！」

霊夢と早苗もやってきた。

「魔理沙、私達も応戦するわ。」

ベン達は、浜名湖の隅っこ海の近くにハイブリードの基地を見つけた。

「あつたよ。あそこに。」

水色のモコは、嫌な予感がしていた。

水色のモコは、ベン達に東京湾に行くことを言って、一人行動をとった。

ベンは、ヒューモンガゾーになって、基地を襲った。

DNAリアンとの戦闘開始した瞬間、電磁波らしきものが放たれた。

しかも東京湾だ。

ハーブが霊夢たちと戦闘しているということだが、米苗ハーブは、ハイブリードの30倍ほど強い。

殺戮兵器であるためか、東京では一部の場所で火災が発生していた。

「アンゴル＝モアを上回るパワーを持つ米苗ハーブといくつもの幻

想郷だけでなく全宇宙にも知られている。」

水色のモコは、霊夢たちが苦しんでいる姿を見ていた。

「くっ、ハーブいつの間に此処まで強くなるなんて！」

「霊夢、早苗、魔理沙、私の攻撃を逃れられたのは良かったがもう終わりだ。死ねー！」

無表情で言ったハーブだが、結界がシールドの役割を得た。

「何だこれは？」

「モコだわ。」

モコは、結界を張りながら、黒いピラニアで攻撃を始めた。

米苗HARPは、電離層をいじって封殺しようしたが失敗した。

「この私を倒そうとするなぞ、愚かだ！地震 電離層の悲鳴」

奇妙な形の弾幕が放たれた。

エレメントXが、其れを封殺した。

封殺に封殺を繰り返す闘いに勝利は見えると思えたが、ハーブは退散した。

「お前達とかかわるには、殺沢仁枇體様をご復活させたからだ。」

モコとエレメントXも知っている。

米苗ハーブのことは。

ハイブリードは、セルインジー・キリストと対決となった。

別のハイブリードなので、少し違っている。

セルインジー・キリストは、贖罪を操っていた。

「やめろー！」

ハイブリードの叫び声が聞こえていた。

「楽しませてくれてありがとうハイブリード、安らかに眠ってくれ。」

セルインジー・キリストは、贖罪を粉々にした。

ハイブリードは、ゆっくりと倒れこんで帰らぬエイリアンとなった。

風間トオルを救うことに成功したが、モコとエレメントXと霊夢たちは納得していなかった。

米苗ハーブに関してイライラするところが多いからである。

「僕も、今回は、イライラします。僕の部下であるマスター・ヴェルから聞きましたが彼は相当強いのです。」

「それにあいつは、無理難題の敵だからね。」

「諏訪子と神奈子を一度、満身創痍に追いやった相手ですから。
ベンにとってもそいつがどれくらい強いかわかった。」

次回 淋無喜有」辻褃合わずの篇 第五話 米苗ハープの再来

淋無喜有」

辻褄合わずの篇

第四話

特別任務く風間トオルを救い出せく

展開激しいぜ全く（笑）

淋無喜有」辻褃合わずの篇 第五話 米苗ハーブの再来（前書き）

本人の活躍があまり見られませんがいやばいことになっていきます。

淋無喜有」辻棲合わずの篇 第五話 米苗ハーブの再来

淋無喜有」辻棲合わずの篇 第五話 米苗ハーブの再来

米苗ハーブは、殺沢仁枇體を閉じ込めている場所にいた。

「仁枇體様、そこから出るには？」

「鍵を35個とってきてくれ。」

「了解しました。1個目の鍵のありかは、群馬県の山奥にあるので、ハイブリードを4体出させます。」

ハイブリードと地球人は、一度和解しているが、今回の事件で、また疑われてしまった。

ベン・テニスは、幻想郷にいるラインラシル3世と話してみることにした。

「えっ、みんな操られているの？」

「そういうことだ。俺はどうにか逃れた。」

「ハイブリード達は、誰に襲われたの？」

「殺沢仁枇體という者の手下と思わしき者達が我々に洗脳喝撃という兵器にやられて殺沢仁枇體の配下に置かれている。」

コールド・ハンティング

霊夢は、殺沢仁枇體のことでハッと気がついた。

「東方地球危の時にいくわした史上最強の妖怪。」

魔理沙と早苗は、腰を抜かすくらい殺沢仁枇體の恐怖が今でも残っている。

水色のモコは、部下を全員呼び出した。

マスター・ヴェルは、水色のモコに質問をした。

「モコート・ディセスティア・ヴァンスー・フライング・フライ様、殺沢仁枇體って誰でしょうか？」

モコは答えた。

「史上最強の妖^{あやか}だよ。しかも新種の妖怪。全長35メートルの巨体を持つ二足歩行で、ビックフット以上の足の大きさだ。」

グクヴは、殺沢仁枇體と縁がある人物の情報を言った。

「御刃彦之尊、カタリーナ、インフルケイド、ハルゼパブという部下以外にもいませんでしたか？」

「確かにいたよ。500人程だが。」

「500人もいたのー！」

マスター・ヴェルも困っていた。

「そんなに手下がいるなんて呆れた。」

ミニコーナー

ダーク・アフタヌーン

種族 新型妖怪

能力 昼と夜を反転させる程度の能力・ネットワークを操る程度の能力

性別 男

テーマ曲 朝夜反対（network range）

モットー 朝が夜になり、夜が朝になれば、人は壊せる。

妖怪とエイリアンをコンピューターが探知した。

場所は、群馬県である。

ケビン達ベン10チームは、車に乗り、カドルス達、闇幻想郷チームもおんぼろバスに乗った。

他のみんなも群馬県の山奥に移動した。

DNAリアンが15,000体、赤色のモコが10,000体、ハイブリードが4体とダーク・アフタヌーンがいた。

ベンは、オムニトリックスからクロマストーンというエイリアンヒーローに変身した。

浅井山も到着していた。

カドルス達は、DNAリアンと赤色のモコを引き付けることになった。

浅井山は、エイリアンチップで、ゾンドリームに変身した。

「俺、参上!!」

とはいえ、登場する時の口癖がこれなので非常に困る。

ハイブリードに関しては、ベン達に任すことにした。

ダーク・アフタヌーンには、水色のモコと霊夢と魔理沙が退治することにした。

ダーク・アフタヌーンの全長は1m75?という大きさである。

「さて、私達もこいつを倒しちゃいませよ。」

「ああ、そうだな。」

「僕は、合図をしますので待っていてください。」

エレメントXは、モコに30番目の元素核と45番目の元素核を投げた。

モコは、二つの元素に結合をした。

「バースティック!」

モコは、元素核と結合をするとパワーが上がって別の妖怪やエイリアンに変身ができる。バースティックは、30番目の元素と45番目の元素がモコに結合したため、誕生した。

外見は、フォーアームズに酷似しているが、全長2m20?で、目からビームを発射する。モコの無限の能力は、いったん切れている。

此の姿でいられるのは、10分間だけである。

「俺の攻撃が合図だ良いな！よしっ開始だ。」

バースティックは、目からビームを放った。

ダーク・アフタヌーンは、闇と光を反転させようとしていた。

次回 淋無喜有」辻褃合わずの篇 第六話 霧に隠れた者

淋無喜有」辻褃合わずの篇 第五話 米苗ハーブの再来（後書き）

殺沢仁枇體と御刃彦之尊。もう知っていますね。

淋無喜有」辻褃合わずの篇

第六話

霧に隠れた者（前書き）

三本立ては此処までです。

淋無喜有」辻棲合わずの篇

第六話 霧に隠れた者

淋無喜有」辻棲合わずの篇

第六話 霧に隠れた者

ダーク・アフタヌーンは、闇と光を反転しようとした途端、バースティックのビームに当たった。

「こいつ、やりやがったな！」

エレメントXは、88番目の原子核を銃に変えた。

「バースティック、此れを使いなさい。」

バースティックは、銃を持ってダーク・アフタヌーンに発砲した。

ダーク・アフタヌーンは、胸に貫通して血を流しながら倒れた。

バースティックは、水色のモコに戻った。

3つの原子核は、エレメントXの体内に入って行った。

闘いは、終わっていた。

配管工基地に戻ったベン達は、浅井山から新しい任務を貰った。

「君達にすこしきつい任務を教えよう。小笠原諸島の一つにインフルケイドがいる。そいつは新型インフルエンザが、幻想入りした後、妖怪化した奴だ。最近伊豆諸島で悪さをしていたらしい。グアムに行こうとしているところを食い止めてくれ。健闘を祈る！」

ケビンとベンと水色のモコとシフティとエレメントXが行くことになった。

他のみんなは、基地内で援護できるような体制をとり始めた。

エレメントXは、112種類の元素達にとって、動くノアの箱舟のようなもの。

つまり、元素がいつ消失しても彼の体内に入っていれば安全である。

エレメントXは、プラズマエネルギー型生命体であるため、どんな攻撃を受けてもびくともしない。

グアムに向かっているインフルケイドと一緒にいたのは、パソコン型のエイリアンだった。

「ついてこれるのかよ。セクターデッド！」

「うるさいなインフルケイド少し黙れ。」

あまり仲は良くないようだ。

エレメントXは、1ボルトの電圧を空飛ぶ絨毯のようにして、ベン達に乗せた。

「これってしびれないのかな？」

ベンは、疑問に思った。

「ハハハ、大丈夫だよ。1ボルトは、私が使うとしびれるのを防ぐ効果があるから危険性はない。」

エレメントXは、笑いながら言った。

モコは、2人の姿を確認した。

「いたよ！あそこに。」

ケ빈は、1ボルトの電圧を吸収した。

「これで相手をしびれさせれるぜ。」

ベンは、新型インフルエンザに対抗ができそうなエイリアンを選択した。

「よしっ、こいつにしよう。」

ベンは、ビクチルに変身した。

モコは、7番目の原子核と結合した。

「モコート・ディセスティア・ヴァンスー・フライング・フライ、エレメントイズトランスフォーム！メットスロット！」

メットスロットは、スロットマシン型トランスフォーマーがモコと契約を結んだ時に誕生した姿である。

さらに変形してロボットモードになった。

エンプレムは、サイバトロンのようである。

ミニコーナー

セクターデッド

種族 パソコン型エイリアン

性別 男

能力 ネットワーク中枢を麻痺させる程度の能力

モットー インフルケイドよりも強いことを証明してやる。

ビクチルは、インフルケイドを凍らせた。

「こんなものぬるい！」

インフルケイドは氷をぶち破った。

「なんていう馬鹿力だ！」

セクターデッドは、メットスロットと対決し始めた。

「貴様の身体を乗っ取るぜ！」

「それは、どうかな？」

メットスロットの胸部からメダルの形のミサイルが発射された。

セクターデッドに命中した後、ケビンの攻撃を受けて撃沈させられた。

インフルケイドは、退散した。

任務は成功して、みんながホッとしていた。

フレイキーは、外に出て何かを見ていた。

霧が立ち上っていたがスツと消えた。

そこに人物がいたが何なのかは分からなかった。

マスター・ヴェルは、モコにある任務を貰っていた。

赤い蛙の尾行である。

次回 淋無喜有」辻褄合わずの篇 第七話 新しいエイリアンヒ
ーロー

淋無喜有」辻褃合わずの篇

第六話

霧に隠れた者（後書き）

次回も三本立てです。

淋無喜有」辻褃合わずの篇

第七話

新しいエイリアンヒーロー（前書き）

三本立てです。近いうちに劇場小説版が迫っています。

淋無喜有」辻棲合わずの篇 第七話 新しいエイリアンヒーロー

淋無喜有」辻棲合わずの篇 第七話 新しいエイリアンヒーロー

ハイブリードの企みではなく、殺沢仁柢體であることが分かった。

しかし、あのものは凄く強い。

倒す策はあるのか？

モコは、カドルスとキッズウィンと話し合っていた。

それは、ラインラシル3世が持っている謎のカード。あれは、殺沢仁柢體のカードである。

「あのカードをライニーから貰おうかな？」

「今、彼は幻想郷にいるな。」

「僕は、もう一回幻想郷へ言ったほうがいいと思います。」

霊夢とベンとグウェンとモコとキッズウィンとカドルスと台風の狂気と寒冷低気圧は、幻想郷に向かった。

セルインジー・キリストは、卒陀に通信をとった。

「殺沢仁柢體の情報ないかな？」

「情報は、ないです。すみません。」

カタリーナとインフルケイドは、ネールヨッシャを呼び出した。

「お前、港区に行ってくれ。」

「了解しました。」

ネールヨッシャの全長2・5センチメートルで殺傷能力は、あまりないが増殖力が強いいため、危険とみなされている。

其れに気付くかどうかは分からないのである。

モコ達は、ラインラシル三世に出会った。

「此のカード、たぶん暗号化されていて、自分も色々試してみましたが、不正解という文字が出てきて困ったもんだよ。」

台風の狂気は、ノートパソコンに何かを殴り打った。

「御刃彦之尊と殺沢仁枇體と米苗ハープ」

これでアクセスは成功した。

ノートパソコンの画面に現れたのは、別の配管工部隊のサイトである。

「これは、浅井山さんに連絡してみるわ。」

グウエンは、浅井山に連絡を取った。

「そのサイトですが、どうやら太陽系第3惑星第64エリアにいる風間トオル小規模リーダーが立ち上げたサイトですね。このサイトは、殺沢仁枇體という恐ろしい存在を配管工部隊全員に警告している。ただしそれ以外のネットワークではパスワードが必要となります。」

グウエンは、ベンに知らせるため電話をきった。

ネールヨッシャは、増殖していた。

ベン達は、この情報を頼りに人間界に戻った時には、ケビン達が待っていた。

「どうしたの？」

周りには、ネールヨッシャが飛び回っていた。

「こいつら、数が多すぎるんだが。」

台風の狂気は、自然の力で道路上に塔を出した。

「さあ、聖木の塔よ！小さくて増殖し続ける奴を止めろ。」

聖木の塔は、ネールヨッシャを一人ずつ捕まえて木の枝でできた拳で潰した。

「蠅のように飛び回るやつですね。」

モコが言った。

ベンは、ナノメックに変身しようと考えたがモコに止められた。

「何だよ。」

モコの電子の触手がオムニトリックスに触れた。

オムニトリックスに反応があった。

「君は、本当に第三の存在なの？」

ベンは言った。するとモコはこう答えた。

「僕は、エイリアンでもあり地球上の生命体でもあるのです。オムニトリックスに僕のDNAがインプットされたと思います。それに变身してください。」

ベンは、オムニトリックスに触れてモコに変身したが、モコート・ディセスティア・ヴァンスー・フライング・フライは、種族名であるため、ベンは、新しいヒーローに名前を付けなければならない。

「セート・ディセスティア！」

モコとセートは、同じ体格だが、眉間の中心にマークがある為、区別ができる。

寒冷低気圧は、寒い空気でネールヨツシャを凍死させていった。

カドルス達も参戦した。

「サンタ・サンダー！」

キッズウィンとフロッグマンとシャーベルタイガーは、発生源を見つけた。

モコとセートは、結界でネールヨツシャを次々と爆死させて行つた。

「結構強いなモコって。」

「僕の種族は、地球の中間層で生まれます。そのため、文化を地球側と宇宙側からもらうのです。」

「人の話聞いていねえー!」

次回 淋無喜有」辻褃合わずの篇 第八話 吹かれた風

淋無喜有」辻褃合わずの篇

第七話

新しいエイリアンヒーロー（後書き）

まだまだ続くよ。

淋無喜有」辻褃合わずの篇

第八話

吹かれた風（前書き）

とにかく凄いです。

淋無喜有」辻棲合わずの篇 第八話 吹かれた風

淋無喜有」辻棲合わずの篇 第八話 吹かれた風

セートとモコは、キッズウイン達と合流した。

ネールヨツシャの塊が合体して巨大な人物になった。

ネールプツシュとなってしまった。

全長8メートルの巨体で、殺傷能力も強い。増殖はしないが身体からいろんな武器が出てくる。

ミニコーナー

ネールヨツシャ

種族 蜘蛛型エイリアン

性別 男

能力 増殖するだけの能力

テーマ曲 短き意味

モットー 小さいからこそ強いのだ。

台風の狂気は、自然界の力をネールヨツシャにぶつけた。

ネールヨツシャは爆発した。

ネールプツシュは、キッズウイン達と戦っていた。

「ブラックホールセイバー！」

ネールプッシュを切り裂いたが、再び元に戻った。

「何だこいつ、気持ち悪いな。」

キッズウィンは、サンタ・サンダーソードを持った。

ネールプッシュは、サンター・サンダーソードをへし折った。

「これではだめだ。」

モコとセートは、結界を弾丸の如く放った。

ネールプッシュを粉々にしたが、再び元に戻っていた。

「僕の家具よ。此处に揃え！」

マスター・ヴェルと西南芳とタチイヌイヌノフグリとトゥーガイアとヴァネーボツツとグクヴというモコート・ディセスティア・ヴァンスー・フライング・フライの家具達が揃った。

「モコート・ディセスティア・ヴァンスー・フライング・フライ様、あいつを狙えばいいのですね。」

「しかし、手段は選ぶな。」

「了解。」

ネールヨッシャの数が減っていた。

ケビンとグウェンは、最期の二匹を退治した。

「これで最後ね。」

「後は、あの化け物を倒すだけだ。」

モコの家具達が全員でかかっても倒せない。

「モコート・ディセスティア・ヴァンスー・フライング・フライ、3番目の元素と5番目の元素と結合してください。」

エレメントXは、モコにそう言った。

「よしっ、モコート・ディセスティア・ヴァンスー・フライング・フライ、エレメントイズトランスフォーム！クオールロイディア！」

クオールロイディアは、外見は、ダイヤモンドヘッドに似ているが結晶から衝撃波が出せるためその力は半端ではなさそうだ。

「セート、援護を頼む。家具達も援護を頼むぞ。」

「了解！」

はたして、ネールプッシュとの決着は？

次回 淋無喜有」辻褃合わずの篇 第九話 理由になれない

淋無喜有」辻褃合わずの篇

第八話

吹かれた風（後書き）

まだまだ続くよ。

淋無喜有」辻褃合わずの篇

第九話

理由になれない（前書き）

新キャラ登場！

淋無喜有」辻褃合わずの篇 第九話 理由になれない

淋無喜有」辻褃合わずの篇 第九話 理由になれない

クオールロイディアは、衝撃波を起こした。

ネールプッシュは、バラバラになったがまたくつついた。

「モコート・ディセスティア・ヴァンスー・フライング・フライ様の変身した者の攻撃を食らわないとは、なんという奴。」

マスターヴェルは、呆れていた。

ニョロトリオは、ネールプッシュを倒す方法を考えた。

「水のカフルバースト状態ok、水のカフルパワー状態ok、水のカフルショットモードok。目標補足、ブラストキャノン発射！」

ネールプッシュは、大爆発した。

水の弓矢は、ビルをも貫通させるほどの破壊力である。

台風の狂気は、驚いていた。

ベンとグウェンは、ネールプッシュが消失したことを確認した。

モコは、少し疲れていた。

カドルスとギグルスとフリッピーは、あることを話していた。

「僕達でも、相当な強さがあると思うんだ。」

「でも、今回は、ニョロトリオの魔法が勝ったね。」

「結構強いな。ブラストキャノンって。」

ミニコーナー

ニョロトリオ

種族 おたまポケモン

能力 水を自由に操る能力

性別 3匹とも男

テーマ曲 未完成／錨に身を任せて／

モットー 3匹が揃わないと僕達の攻撃は成立しない！

殺沢仁枇體と御刃彦之尊は、カタリーナとインフルケイドを呼び出した。

「何か御用ですか、仁枇體様。」

「むちかのすけ武智叶野助と一緒に配管工を襲え。そしてグウェンとベンを八つ裂きにしてこい！」

「了解しました仁枇體様。」

ミニコーナー

インフルケイド

種族 新型インフルエンザ

性別 男

能力 人々を苦しめる程度の能力

テーマ曲 感染幻想郷virus fantasy break
モットー 幻想郷を我が力で苦しめるそれが俺の運命だ！

武智叶野助

種族 大黒天

性別 男

能力 三つの力を利用する程度の能力

テーマ曲 ブリッツウイングのような大黒天

モットー 吾は、武智叶野助。これより、僕の力を冥府の歌で届けてやるよーだ。

インフルケイドとカタリーナは嫌な顔をしていた。

なぜなら武智叶野助は、ある意味では音痴の大黒天である。

大黒天は、かつこいいというイメージだが、武智叶野助は、あまりカッコイイとは思えない。

「どうして、二人は、引いてるんだ？」

「それは、なんだ二手に分かれるときの練習みたいなもんだ。」

ベンとグウェンとケビンとトゥーシーとキッズウインは、渋谷にいた。

どうやら配管工の任務である。

武智叶野助とカタリーナとインフルケイドが現れた。

「俺は、三つの性格と三つの力を持つ凄い奴。武智叶野助だ。」

みんなが白けた。

ケビン達は、ハッと気付いた。

「くそ、白けさせやがって。」

「お前がしらけさせたんだろ！」

次回 淋無喜有」辻褄合わずの篇 第十話 ベン・テニスン 謹慎処
分

淋無喜有」辻褃合わずの篇 第九話 理由になれない（後書き）

次回も三本立てです。お楽しみにと劇場小説版もお楽しみに！

淋無喜有」辻褃合わずの篇 第十話 ベン・テニスン謹愼処分（前書き）

三話連続じゃないのです。ごめんなさい

淋無喜有」辻褃合わずの篇 第十話 ベン・テニスン謹慎処分

武智叶野助は、場をしらけさせた。

「クソ、白けさせやがって！」

「勝手に、しらけさせたんだろう！」

キッズウインは、攻撃を始めた。

「サンタ・サンダーα」

インフルケイドとカタリーナは、サンタ・サンダーαを避けまくった。

「こんな攻撃を何度も受けてたまるかー！」

カタリーナはスペルカードを利用した。

「捏風 偽られた暴風域」

弾幕が襲いかかり、ケビンとトウーシーに襲いかかった。

「シールドで守られたか！」

グウェンの援護により、助かったもののまだ脅威はいた。

武智叶野助は、スペルカードを利用した。

「これで、おまいら、おしまいだー！悶死 絶対なる破壊と豊作」

厄介な場所から弾幕を放たれた。

ベンは、クロマストーンになり、その弾幕を喰いとめた。

「かなりきついよ。これはじゃー倍返しだ！」

「どわあー！」

インフルケイドは、みんなに気がつかないようにグウェンに近づいた。

グウェンの右腕に痛みが走った。

「注射器でこの発熱したら死ぬまで治らない奴を注入したぜ。」

インフルケイドとカタリーナと武智叶野助は、退却した。

トウーシーとキッズウィンが何か嫌な予感を感じていた。

ベン達は、基地に戻ると浅井山智熱がいた。

「浅井山殿、どうしてここに？」

「ベン・テニスン、我々の許可なしに殺沢仁枇體軍団に闘いをした罰で2ヶ月間の謹慎処分とする。」

ケビンが反論した。

「俺達は、パトロールをしていたら突然、現れたんだよ。」

浅井山は、ゾンドリームになり、ケビンに言った。

「あれは、我々の敵である。君達は赤色のモコの行動を探る任務で構わない。」

台風の狂気とセルインジー・キリストは、浅井山智熱のほうに入った。

寒冷低気圧は、あることを言った。

「グウエンの様子が変わですよ。」

グウエンは突然倒れた。

ケビンは心配して額に手をかざした。

「すごい熱だ。インフルケイドの奴が何かをしでかしたな。」

一方、殺沢仁枇體軍団のリーダー殺沢仁枇體は、ハイブリードに言った。

「もう貴様らに用はない。」

「しかし、それでは今までの演技をベンという少年に教えますよ。」

「どうせ、教えたって無駄だ。」

ハイブリードは、殺沢仁枇體の顔面を殴った。

「貴様、殺沢仁枇體様になんということをし！」

「御刃彦之尊は、さがれ！俺を本気で怒らした罰だハイブリードお前を殺してやる。」

「殺される前に逃げなければ・・・」

殺沢仁枇體は、ハイブリードの頭を強く持った。

「しまった！」

「極殺 トルネード・デッド・バースト」

強く回されて投げ出された。

ハイブリードは、殺沢仁枇體が持つアトランティスの杖に心臓部を貫かれた。

次回 淋無喜有」辻棲合わずの篇 第十一話 謹慎解除と謎の存在

淋無喜有」辻褃合わずの篇 第十話 ベン・テニスン謹慎処分（後書き）

次回もお楽しみに！

淋無喜有」辻褃合わずの篇 第十一話 謹慎解除と謎の存在（前書き）

このお話から、一話態勢になります。騒ぎから2ヵ月後、謹慎解除と一緒に新たな存在があつた。

淋無喜有」辻褃合わずの篇 第十一話 謹慎解除と謎の存在

謹慎処分を受けてから明日で2カ月目になる。

「殺沢仁枇體軍団を早く倒したい。」

ケビンとセルインジー・キリストは、話し合っていた。

「その十字架に赤色のモコがついているぞ！」

「ほんとだ。とりゃー！」

赤色のモコは、変色し始めた。

それを見た水色のモコは、結界針で赤色のモコを葬った。

「危なかった。」

ケビンはモコが隠していることを聞いた。

「なあー、モコ今の奴何に変化しようとしていたんだ？」

「赤色のモコの正体は、バグリンなのです。」

「バグリンって何？」

ベンが気にしていた。

「僕の結界承兵が全滅したということを聞いた時の映像をフリップ

「見せてくれる？」

「良いけど。」

映像の中に、赤色のモコが集まって巨大化していた。

「何だあれは？」

ミニコーナー

モコって生物なのか？

「ベンです。皆さんはモコート・ディセスティア・ヴァンスー・フライング・フライが生命体かどうか考えたことがありますか？詳しいことをマスター・ヴェルさんが解説してくれます。」

「マスター・ヴェルです。モコ様の正体は、元素がそのまま生命体化したものです。かなり重い質量が、細胞となり、モコ様が生まれたのです。」

ミニコーナー終了。

赤色のモコは、次第に姿を変えていった。

「こいつは、バ、バ、バ、バ、バ」

カドルスは、壊れたカセットの動きのように口を動かした。

赤色が次第に黒色に変わり、そして二進法が現れた。

その姿は、かつてハッピーツリーワールド時代に襲ってきた相手であつた。

セルインジー・キリストは、其れを見て言った。

「あれは、バグハグ大王六世だ。まだ生きていやがつたのか。」

杓陀は、バグハグ大王六世を初めて見た。

二進法に身体を変えていく能力は、誰もがみんな初めて見た。

モコは、ベンに言った。

「おそらく、浅井山さんは、此の事を知らないかもしれません。」

次の日、これを見た浅井山は、殺沢仁枇體軍団撃退をベン達のチームにも与えた。

しかし、バグハグ大王六世は、怖ろしい者でもあつた。

ハイブリードが、バグハグ大王六世の頭部を殴つたが、身体が二進法に分かれた。

二進法から、1が鋭い杭のようにハイブリードを攻撃した。

「こいつ、強い。」

二進法から元に戻つたバグハグ大王六世は、ハイブリードを嘲笑つた。

「ははははは、貴様の強さでは此のワシは倒せんぞ！ハハハハハハ。」

バグハグ大王六世は、自らの刺を抜きそれを剣にした。

「愚かな奴、葬ってくれるわー！」

「葬られるのは、ハイブリードお前のことだ！」

ハイブリードの心臓部にバグハグ大王六世の剣が刺さっていた。

「貴様とは、遊んでいる場合はないのだ。」

モコとマスター・ヴェルとカドルスとキッズウィンと牟陀は、武智叶野助を見つけた。

「俺は、平和より戦争が好きなんだー！」

「がっかりです。此の僕は、平和を司るU・NOWenとして貴方を殺します。」

「にげるぞー！」

淋無喜有」辻褃合わずの篇 第十一話 謹慎解除と謎の存在（後書き）

次回 淋無喜有」辻褃合わずの篇 第十二話 トウダイグサ・スカーレット大佐との再会。お楽しみに

淋無喜有」辻褃合わずの篇 第十二話 トウダイグサ・スカーレット大佐との更

ベン10スペシャルにのっとり、2本立てです。

「逃げるぞ！」

武智叶野助は、もの凄いスピードで逃げた。

「禁忌 平和玉」

巨大な球が武智叶野助に襲いかかった。

「ギャー吹っ飛びまーす♪」

キッズウィン達は、トウダイグサ・スカーレット大佐のほうにやってきた。

「おおー懐かしいじゃないかキッズウィン。それにカドルス。ところでその３人は見られない顔だな。」

「僕は、モコと申します。」

「私は、マスター・ヴェルと申します。」

牟陀も挨拶をした後、配管工基地にトウダイグサ・スカーレット大佐を呼んだ。

他のみんなも挨拶をした。

ベンとケ빈は、トウダイグサ・スカーレット大佐を見ていて分かったことがある。

「トウダイグサ・スカーレット大佐って吸血鬼なんだ！」

「そうだよ。たけど平和を壊した奴等の血を啜るだけだ。」

ベンとケ빈は、背筋が凍るような感じがして後退りを1歩だけした。

一方その頃、殺沢仁枇體に追い出されたハイブリード達は、実は、ラインラシル3世に反している反乱軍である。

そこに、何かの船が現れた。

「何だあの船は・・・」

その船には、耳の上にアンテナ見たいものが乗っている者と見覚えのある者がいた。

「あいつは、まさか・・・」

次回予告

ヴィルガクス8世が登場してしまう事態発生。

更には6人の手下が現れて緊急事態。

淋無喜有」ヴィルガクスの篇 第一話 最凶の戦慄降臨

淋無喜有」ヴィルガクスの篇 第一話 最凶の戦慄降臨（前書き）

ヴィルガクス8世がとうとう出現。熱きバトルが繰り広げられる。

淋無喜有」ヴィルガクスの篇 第一話 最凶の戦慄降臨

「何だあれは・・・」

その船は、地上に降り立った。

ハイブリードの一人が、船を攻撃した。

「うるさい奴だな。ぶつ殺してやろう！物質交換の術」

船と同じ成分になった人物、ウトアである。

ハイブリードは、顔面を殴られた。

「こいつ、人間のくせに殺す。」

「僕を殺すことは、完全不可能だ！火遁過剰金銀の各柱」

2体のハイブリードは焼き殺されていた。

「ウトアのおかげで、地球^{ベコボ}についたぞ。」

「そのお言葉を歓迎して待っていました最強最凶の宇宙生命体ヴィルガクス様。」

「こんな下らない星なんですか地球って・・・」

「ヴィルガクス様、さがって下さい。」

「此のロボット喰らえー！」

「解析完了！目的ハイブリード補足完了。ターゲットの目的、抹殺。」

そのロボットの体から無数のミサイルや銃弾が放たれた。

ハイブリードは、苦しみながら闇に堕ちて行った。

「俺は、外道 - 800型だ。よろしく！」

ヌーリとイーウィニヤとボータンは、地球にやってきた。

ウトアとヌーリとイーウィニヤと外道 - 800型は、地球に住んでいるものであるが、ヴィルガクスとは仲が良いらしい。と言うよりも詳しいことは謎だが。

「うちはタイフウがいれば、すぐにやつをころしたいのになあ。」

ウトアの本当の名前は、うちはウトアである。

二人は、スパイ活動して、いち早くうちは一族大量虐殺事件から逃れた者である。

芽隠れの里の崩壊は、うちはタイフウがもたらした。

それに怒りを持つウトアは、彼とは因縁を持つようになった。

ヴィルガクスは、ハイブリードの軍団の一部を壊滅させていた。

ボタンは、手から出る魔力のビームでハイブリードを殲滅していた。

霊夢と魔理沙は、何かの気配を感じた。

「何だろう、異様な妖気は。」

「人間でも、妖気を放射できるものもいるけど・・・」

「これは、異常よ。」

次回 淋無喜有」ヴィルガクスの篇 第二話 最悪のご相手

淋無喜有「ヴィルガクスの篇 第一話 最凶の戦慄降臨（後書き）」

次回もお楽しみに。 淋無喜有「ヴィルガクスの篇OP&EDテーマ」は、後ほど。

淋無喜有」ヴィルガクスの篇 第二話 最悪のご相手（前書き）

ヴィルガクスの篇は8話まであります。

淋無喜有」ヴィルガクスの篇 第二話 最悪のご相手

「これは、異常よ。」

霊夢は、違和感を感じていた。

セルインジー・キリストは、トウダイグサ・スカーレット大佐と話
し合っていた。

「殺沢仁柢體のことなのだが・・・」

「あいつらの行動は、随時追跡中である。」

「そういうことが、バグハグ大王六世はどうだ・・・」

「最近だが、少しだけ行動が活発になっている。」

朝になり、ベンは、あることを気にしていた。

一方、フレイキーとペチュニアは、周りの異変をチェックを行って
いた。

「このあたりも異常なしですね。」

「此処もだけど、きゃ・・・」

「ペチュニアちゃんどうしたの・・・」

二人が見たのはゴキブリであった。

二人はそのあと、気絶しているところをケビンとカドルスに発見された。

「ペチュニアちゃんたちどうしたの？」

「ゴキブリの大群が襲いかかってきたんですー。」

「ゴキブリって僕の可愛い子達のことかな？僕はウトア。ヴィルガクス8世のためならなんだってする。火遁火災熱湯圓」

ケビンとカドルスは、ペチュニアとフレイキーを抱いて逃げた。

「ちっ、逃げたか！だが、僕から逃げれると思ったら大間違いだぜ。透明の術！」

ケビンは、近くのビルの成分をコピーした。

カドルスは、ペチュニア達を遠ざけて、援軍を呼んでいた。

ウトアがどこにいるのかも分からずにケビンは、彷徨っていた。

「くそ、どこにいる。」

ウトアは、気がつかない場所で待ち針を口にくわえて、印を切った。

その結果、胴体は、鉄。両腕は、セラミック。両足は、コンクリート。頭部は、ダイヤモンドになった。

「僕が、此処にいるって気がつかなかった！」

ウトアは、ケビンを襲った。

ケビンは、吹き飛ばされて、ビルの一つを貫通した。

「しくじった。あいつ透明にもなるのか・・・」

意識を失ったケビンにウトアが殺しかかるが・・・

「罪滅 古き罪と新しき罪」

セルインジー・キリストと孕陀とエコーエコーが来た。

ウトアは、もう一人ヌーリを呼び出した。

「ここからが本番だ。水遁水流花殺刃！」

グウエンがシールドを張ったおかげで助かったものの反対からウトアが攻めてきた。

エコーエコーが超音波で攻撃したが、ウトアは超音波を弾いてしまった。

「こいつ」「とても」「強い」

「仏教魔法 仏陀の拳」

大きな拳がウトアに直撃した。

ベンは、別のエイリアンヒーローに変わった。

「スワンプファイアー！」

ウトアは、更に仲間を呼び出した。イーウィニヤと外道 - 800 型がやってきた。

セルインジー・キリストは、更に援軍を呼んだ。

「これでは、さすがに勝てない。あいつらは強すぎる。」

淋無喜有」ヴィルガクスの篇 第二話 最悪のご相手（後書き）

淋無喜有」ヴィルガクスの篇 第三話 ウトア軍団VSベン10チ
ーム。お楽しみに！

淋無喜有」ヴィルガクスの篇 第三話 ウトア軍団VSベン10チーム（前書き

サイエレンスが終盤直前に現れて・・・なんとかスランプ脱出です。
そして驚くべき真実が語られる。間隔開けすぎたorz

淋無喜有」ヴィルガクスの篇 第三話 ウトア軍団VSベン10チーム

スワンプファイヤーは、外道1800型を見ていた。

「お前って、ターミネーターっぽい姿をしているな。」

「俺は、T-800の親戚だ。食らえ味わいの言いミサイルを！」

スワンプファイヤーは吹き飛ばされた。

「こいつ、やるときはやるんだな。」

牟陀は、仏教魔法を使って目くらましを行った。

「彼らが、戸惑っているうちに退却してから体勢を立て直すぞ。」

牟陀が言った言葉にみんなは、一か所に集まりビルの建物の中に入った。

ベンは、セルインジー・キリストに質問をした。

「誰を呼びたしたの？」

「サイエレンス集団だ。奴らならハジケ能力で翻弄するかもしれない。」

サイエレンス集団を覚えているだろうか。

ハッピーツリーワールドの時に、登場したが未登場キャラクターも

いた。

サイエレンスは、理数系真拳の使い手で、ハジケ度は、ボーボボを上回る。

ヒストリーは、歴史真拳の使い手で、サイエレンスの相棒。

字は、国語真拳の使い手。

ダンス・ザ・ポップは、音楽真拳の使い手。

ミュージアミーは、美術真拳の使い手。

覇気丸^{はきがん}は、技術真拳の使い手。しかも破天荒の孫である。

醒新工門^{ザシンエモン}は、地理真拳の使い手。βブロック隊長でもある。

ナマルナキケン^{ナマルナキケン}は、サイエレンスの弟子になろうと頑張っている。今のところ、数学真拳しか使えない。

彼らは、サイエレンス集団ではなく、新ハジケ組と呼ぶことがある。サイエレンスがいろいろ話していたとき、噂を聞くようにサイエレンス集団が来た。

「君たち、彼等が自然界警察の者達だって分からののか。」

淋無喜有」ヴィルガクスの篇 第三話 ウトア軍団VSベン10チーム（後書き

次回 淋無喜有」ヴィルガクスの篇 第四話 ヴィルガクスを捕ま
えるための自作自演。お楽しみに

淋無喜有」ヴィルガクスの篇 第四話 ヴィルガクスを捕まえるための自作自演

自然界警察の集団と手を組むことになるベン達。此処でシーズン1は、終了です。今回は、シーズン2から後半戦に入ってから、新しいストーリーになります。

「自然界警察？何それ、どんな組織なの？」

「序列が140個もあり、それぞれが組織的に活動している。詳しいことが分からないが、組織の中でもウトアが統括している組織は染という組織で、自然界警察の中でも血気盛んらしいです。」

サイエレンスは、詳しく話した。

サイエレンスは、あることを言った。

「君達も自然界警察と協力してみたらどうだい。俺は関わる気はないんだ。なぜなら、ウトアとか、俺みたいなのやだし一度、銀髪で木刀持った男と黄色のアフロ野郎と俺がどっかの店やで口論になって店屋に追い出されたことがあるんだよ。口論の原因は、銀髪で木刀持った奴とウトアが口論に走り始めたせいでもある。」

いや、どっちもどっちだと思っているグウェン。

ケ빈は、その店屋で昼飯を食ったことがあるらしい。

ケ빈は、昼飯を食べているとき4人の口論が目映った。

（まったく困るぜ。騒がしいと昼飯を食っている気分にならない。）

ケ빈は、あの時の昼飯はおいしくなかったと納得していた。

ベンは、自然界警察のデータと配管工（宇宙警察特命部隊）のデー

タをやり取りできないかなと思っている。

配管工のルールで、浅井山にこう言われている。

「ほかの組織とデータのやり取りは、配管工にいるものなら、違法捜査になりかねない。緊急事態以上のときは別だが。」

ベンは、今が緊急事態発生かと思った。

しかし、言いたいけど配管工としてのプライドで喋り事が喋れなかった。

カドルスは、ウトア達がいらないことに気がついた。

「もしかして、自然界警察本部に戻ったのかな？」

サイエレンス達と別れたベン達は、重要な情報を聞き出すことに成功した。

「さて、どうやって自然界警察と接触するかな。」

「ベン、本気で言っているの？」

「僕だって、自然界警察とは関わりたくない。でも緊急事態のときになったらどうするんだよ。浅井山さんが言っていたように緊急事態のときは、情報の交換が必要だって。」

ベンの説得力のある言葉に、グウェンは何も言わなかった。

「ベンらしいぜ。俺も自然界警察とは関わる気はねえ。けど緊急事

態のときは別だろ？」

「ベンの言うとおりだね。自然界警察と接触しましょう。」

牟陀が疑問に思った。

「どうやって、自然界警察と接触する。」

「そのことは、吾が簡単に知っている。」

台風の狂気は、自然界の者であるため、自然界警察のことはよく知っている。

「吾が、自然界という異空間に案内してやろう。」

淋無喜有」ヴィルガクスの篇 第四話 ヴィルガクスを捕まえるための自作自演

次回 淋無喜有」ヴィルガクスの篇 第五話 自然界と配管工接触。お楽しみに！シーズン2は、3月27日連載予定です。お楽しみに

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9606k/>

淋無喜有 ~ Ben 1 0 side S t o r y ~

2011年3月3日10時03分発行